

JK-29

912.4

Ti 238 k2

m

國性爺合戰

近松門左衛門作
武藏屋葎版

912.4 T: 238 to 240



336936

國性爺合戰

近松門左衛門作

正徳五年七月朔日初興行作者六十三歳

花とび蝶驚 けとも人愛へす、水殿雲廓別に春と置、曉日よるほひなす千騎の女、紅唇翠黛色とまじへ、土も蘭麝の梅が香や、桃も櫻も長久に花と見せたる南京の、時代ぞ盛り盛んななる、抑大明十七代思宗烈皇帝と申奉るの、光宗皇帝第二の皇子、代々の讓の糸筋も絶へず亂れぬ青柳と、靡き従ふ四方の國、寶と積んで貢物、歌舞遊宴に長じ給ひ、玉樓金殿の中にも三夫人、九嬪二十七人の世婦、八十一人の女御有り、凡三千の容色、顔客と悦ばしめ、群臣諸侯媚と求め、珍物奇觀の献物、二月中旬に爪と献する榮花なり、爰に三千第一の御寵愛華清夫人去年の秋より懐妊有て、此月御産の當り月、君の徽感臣下の悦び、聖壽四十に及び給へ共、世繼の太子まします、あねて天地の御祈、此度に驗有り、王子誕生疑ひなしと、産殿に名珠美玉と列ね、産衣に越羅蜀錦と裁、御産今やと用意有る、中にも大司馬將軍吳三桂が妻、柳歌君、此頃初子と平産し、殊に男子の乳なれば迎、御乳付の役人其外乳母侍女阿監、役々の官女附添て、掌の上の珊瑚の珠とを嘉祝ける、時

國性爺合戰

に崇禎十七年中呂上旬、韃靼國の主順治大王より使を以て、虎の皮豹の皮、南海の火浣布、到支國の馬肝石、其外邊國島々の寶、庭上に列べさせ、使者貝勒王謹んで、韃靼國と大明國、往古より威と勵、國と争ひ軍兵と動のし鋒先と交へ、互に仇と結ぶ事、且隣國の好に違ひ且の民の煩ひたり、我が韃靼の大國にて七珍万寶くらゐらずと申せ共、女の形餘國に劣つて候、此大明の帝に華清夫人とて隠れなき、美人おはする由、我が大王戀焦れ深く所望に候へば、此方へ送り給つて大王の后と仰ぎ、大明韃靼向後親子の因となし、長く和睦いたさんとのたの如くの御調物、數ならね共鎮護大將貝勒王、后御迎のため參朝とこそ奏しけれ、帝と始め卿相雲客今に始めぬ韃靼の難題、すの淨衛の基と、宸襟安のらざる所に、第一の臣下右軍將李踏天進み出で、今迄の國の耻辱と謹み秘し置き候、去る辛の己の年北京五穀實らず、万民饑渴に及びし刻、某密に韃靼と頼み、米粟數百万石の合力と請ひ國民と救ひ候き其返報に何事にも、韃靼の望一度の必ず協へんと堅く契約仕る、君今四海と保民と治め給ふも、一度韃靼の情によつてなり、恩と知ぬの免畜に同じ、御名残のさる事なれ共、疾々后と送られ然るべしとぞ奏聞す、大司馬將軍吳三桂たいろら殿

にてとつくと聞、御階欄干踏ちらし李踏天が膝元にぞうと座し、不便や御邊のいつの間にも畜生の奴との成りたるぞ、忝も大明國の三皇五帝禮樂と興し、孔孟教と垂れ給ひ、五常五倫の道今にさるんなり、天然に佛因果とて断惡脩善の道有り、日本に正直ちうぢやうの神明の道有、韃靼國にの道もなく法もなく、飽迄に喰ひ暖に着て、猛き者の上に立ち弱き者の下に付く、善人悪人智者愚者の別もなく、畜類同然の北狄、俗よんで畜生國と云ふ、如何に御邊が頼むとて數百万石の米穀と合力して、此國と救ひしとの不審し、民勞れ饋に及ぶの何故ぞ、上によしなき吝と勤め、宴樂に資と費し、民百姓と責はたり、己が榮花と事とする、其費と止めれば、五年や十年民と養ふに事と、ぬ大國の徳、敵慮も計らず、公卿僉議にも及ばず、懷妊の后と輕しく夷の手へ渡さんと云ふ心底聊心得ず、契約の御邊との相對、上に知しめぬ事、畜生國の貢物、内裏の汚れ取て捨よ官人共と、北狄と事ともせず國の威光と見せたるの、管仲が九度諸侯の會も斯やらん、韃靼の使貝勒王大きに怒つて、マアア大國小國のともあれ、合力と得て民と養ひし恩も知らず契約と變するの、此大明こそ道もなき法もなき手に足ぬ畜生國、軍兵と以て押寄帝

國性彙合戰

四

も后も一くるめ、我大王の履持にする事、日と數へて待つべしと、席と蹴たて立歸る、李踏天引留め、暫く／＼憤怒尤至極せり、某先年母國の合力と謂て、一粒も身の爲にせず、國と助けし忠臣の道なるに、今又約と變じ兵亂と招き君と苦め民と惱し、刺恩と知らぬ畜生國と云はせん御代の耻國の耻、此度臣が身と捨て君と安んじ國の恥と淨むる忠臣の仕業、是見給へど小劔逆手に扱持ち弓手の眼にぐつと突立て、眼蓋と懸てくるり／＼とくり出し、朱に成たる晴ひつづのんで、なふ御使者兩眼の一身の日月左の眼の陽に屬して日輪なり片目なければ不具者、一眼とくつて韃靼王に奉る、國の恩と報する道と重んじ義と守る大明の帝の忠臣の振舞ひ是候と、笏にすへて差出せば貝勒王押いたゞき、ア、天晴忠節や候、只今吳三桂の云分にてい、いや共兩國權と争ひ合戦に及ぶ所、天下の爲に身と捨て、事と治め給ふ事神妙／＼、忠臣共賢臣共申すにも餘り有り、后と迎へ取たるも同然、我大王の極感使に立たる某も、面目是に過ぐべからず早お暇とぞ奏しける、歐羅殊にうるのしく、李踏天が眼とくりし伍子胥が餘風、吳三桂が遠き感りの范蠡が趣あり、兩臣まつりごとと糺す我國の千代万代も變まじ韃靼の使の早本國に返すべしと宴樂殿

に入り給ふ、實に倭臣と忠臣の面似たる紛れ者、目さしと知らぬ南京の君の榮花を例なき、爰に帝の御妹梅檀皇女と申せしり、未だ御年も十六夜の月の都の宮人の胤や此世にふる麗の玉とのべたる御姿、管弦の道文の道文字も働く口すさみ、日本で歌と云ふげなが男女と和睦とや、爰にも戀の紹介の變らぬものと詩と吟じ、年より老し御心、兄弟の奢のさや色にふけり酒宴に誇り、朝政事し給はぬ御意見の種にもと、行儀正しき御身持、時の女官召し寄せて、浮世咄も囁きの耳の懸する目も睨む、心が伽羅の燒さしの、思ひ埋ておのさる、長生殿の方より出御成と呼はつて、二十限りの后達二百人、梅と櫻の遣枝百人宛片別て振のたげ、左右に召具して入給ひ、なふ妹君我れ万乗の位につき、臣下多き其中に右軍將李踏天の遂に朕が命に背らす明暮心と懸る第一の忠臣、御身に心と懸ると聞く幸ひ朕が妹鐙にせんと思へ共、御身更に承引るく今日迄の打過たり、然るに此度韃靼國より無体の難儀と云ひのけ、既に合戦に及び國の亂と成るべき所、吳三桂なぞが忠臣顔口先の道理の誰も云事、李踏天が左の眼とくつて宥めし故使も伏して歸つたり、國の爲君の爲身と捨て不具と成る、未だ無双の忠臣賞せずんば有るべからず、是非に朕が妹鐙、北京の

國性彙合戰

五

國性綜合戰

六

都と譲らんと約せしが、御身承引有るまじと此花軍と催せり、賢女立してすんくくと素氣なき御身が心と表し、梅花と味方に參らする、朕が味方の櫻花女官共に戰せ、櫻が散て梅が勝ば御身の心に任すべし、櫻が勝て梅花が散ば御身の負に極て、李踏天が妻となす、天道次第縁次第、勝も負るも風流陣懸れや懸れと宣言有る、下知に従ふ梅櫻左右に分つて備へける、勅誑なれば姫宮もよし力なし、去ながら心にうまぬ妻定め、左右なう引べき様ななし、花も我身も咲のけて、當今の妹柳檀皇女、縁の分目の晴軍、大將軍の我なりと名乗も敢ぬのさしの梅、誰が袖ふれし梢にひれ居鶯の翼にのけちらす、羽音も斯やと梅の香もふんふん打亂受つ流しつ戰ふたり、姫君下知しての給はく、柳うづまく木影にの風ありと知るべし、弱き枝にの替もたせ、強に花と開のせよ、うつろふ枝と格にのへて互に力と合すべしと、花に慣たる下知に由て叫いて懸れ花と踏で、同じく惜む色ぞある、唯一文字に頭になせば二月の雪とちるもあり、落花狼籍入亂軍の花とぞちらしける、豫て帝の仰によつて、心と合せし女官たち梅方わざと打負て、枝も花も折亂されむらくばつと引ければ、勝色見せて櫻花サア姫宮と李踏天、御縁組の極つたりと無數の女官

同音に、勝時あぐる頻伽の聲宮中ひき渡りし、千羽鶴百千鳥囀りのはす如くなり、司馬將軍吳三桂 鎧兜さのやりに出立て、假月の戦會釋もなく振廻し、梅も櫻もさんくに雍散御前に畏り、只今玉座の邊お合戦有りとして時の聲殿中ひきき、宮中以外の外の騒さによつて、物の具のため馳參じ候へば扱馬鹿らしや、御妹柳檀女と李踏天が縁定の花軍との、天地開けて此のた斯るたわけた例と聞ず、君知しめさずや一家にあれば一國仁とてし、一人貪戻なれば一國亂と起すといへり、上の好む所に従ふの民のならひ、此事と聞および山が土民の嫁取り聲とり、爰にても花軍彼處にても花軍、喧嘩どうしやうの端と成る花の散て打物おさ、誠の軍起らん事鏡はのけて見る如し、只今にも逆臣おこり宮中にせめ入り、叫呼時の聲の聞ゆる共、すの例の花軍と走まいる勢もなく、玉体とやみくも逆臣の刃にのけん事、勿體なし共淺まし共悔むに甲斐の有るべき、其逆臣俊臣とは李踏天がと、君の忘れ給ひしもの若年の時、鄭芝龍と申者俊臣と擯斥給へど、諫め申と逆鱗有り、鄭芝龍の追放たれ、今老一官と名とのへ日本肥前の國、平戸とのやに住居致すと承る、鄭芝龍がつたへ聞、日本迄大明國の御耻辱ならずや、先年大明飢饉の時、李踏天が邪

國性綜合戰

七

智と以て諸國の御藏の米と窃み、君に憐みなき故にのれ韃靼の合力を受け、民と教ふと云ひなし國中に救しわたへ、万民となづけ謀叛の臍とめしと、知ろし召れぬ愚さよ、彼が左の眼とくりしは是ぞ韃靼一味の相圖、御覽候へ南陽の額、大明との大きに明らる也といふ字訓にて、月日とならべ書たる文字此大明の南陽國にして日の國也、韃靼の北陰國にして月の國、陽にぞくして日に譬へし左の眼とくつたるは、此大明の日の國と韃靼の手に入ん一味の印、使もさそく其理と悟悦んで立歸る、積惡奸曲の佞臣はやく五刑の罪に沈めずんば、聖人出世の此國 忽もうこのいさに落ち、尾とふり皮とらふらぬ斗畜類の奴と成り、天地の怒り宗廟の神崇りとなし、其罪帝の一身に歸せんと拳と以て大地と打つに外る、共、吳三桂が此詞の違ふまじ、怨めしの穢慮やと泣の怒つ、理とつくし詞とつくして奏しける、帝大きに逆鱗有り物しり顔成る文字の講釋、理と付けて云ふならば白雪のへつて黒し共いふ義有り、皆李踏天と嫉みの詞、事もなきに甲冑とたいし朕に近寄る汝こそ、逆臣よと立ち、つて御足にのけ、吳三桂がまづのうと踏付け給へば不思議やな、御殿類に鳴動して勅筆の額もるぎ出、大の字の金刀點、明の字の日片、微塵に碎け散つたるは天

の告りと恐ろし、吳三桂猶身と惜まず、情なや、御眼も暗みしる滂耳も聳たるの、大の字の形一人と書たる筆く、一人との天子帝の御と、其一人の一てん取れば帝の御身の半身、明の字に偏なければ日の光なき國はとこやみ、悉くもあの額の御先祖大祖の皇帝、御子孫繁昌御代万歳と宸翰とぞめ給ふ宗廟の神の御怒り恐しと思召、道とたゝし非と改め御代と保ちましまさば、君になげうつ吳三桂が一命、踏み殺され蹴殺されても厭は、ころ土共なれ灰共なれ、忠臣の道の違へじと、御衣にすがり大聲上げ、涙と流し諫めし代々の、鏡と聞てへける、斯る所に四方八面八馬の音貝鉦鏘し太鼓と打ち、時の聲地と動ろし天も傾ぶく斗なり、思ひ設けし吳三桂高樓に駆あがり、見渡せば山も里も韃靼勢旗となびのし弓鉄砲、内裏と取巻せめよせし湖の満くる如く也、寄手の大將貝勒王庭上に乗り入り大音上、そもく我國の主順治大王、此國の後華清夫人に戀慕との謀略、懐妊の后と召取大明の帝の胤と絶さん爲、季踏天が眼とくつて一味の印と見せたる故、時と遷さず押寄せたり迎も叶ぬ吳三桂、帝も后もらめ取て味方にくだり、韃靼王の臺所につくばい、あし水でもす、つて命とつけとぞ呼はりける、事からし、百八十年草木もゆるがぬ

明朝と、攻破らんなんぞ、大海に横たはる、鯨と蟻の狙ふにとならず、あれ退はらへ
 と驅廻つて下知すれ共、我手勢百騎斗のち武者ならで、公家にも武家にも誰有てお
 り合ふ味方のあらざれば奉して控つて立たる所に、女房柳歌君水子と肌を抱きながら、后
 の御手と引立なふ口惜や御運の末、公卿大臣と始維入下郎に至る迄、李踏天一味して御
 味方の我々斗、無念至極と切齒となせ、悔なく云ふて益なし、但し後の胎内に帝の胤
 とやどし給へば大事の御身、一方と切抜けて君諸共に、某お供申べし其子も爰に捨置き、
 あとは一先御妹と介抱し、あい道の港とさして落ちよくと云ひければ、心得たりといひ
 く、敷梅擅皇女の御手と引、金川もんの細道と二人忍びて落ち給ふ、いで是のらゝの大手の
 敵と一當あて、退ちらし、安くと落とし奉らん御座とさらせ給ふと言ひ捨てのけ出で明
 朝第一の臣下、大司馬將軍吳三桂と名乗のけ、百騎にたらしぬ手勢にて、數百萬騎のもうこ
 の軍兵わりたて、かん廻し無二無三に切れば、韃靼勢も餘さじと、鉄砲石火矢すさまな
 く、しぎよくと飛ばせて戦ひける其隙に、李踏天弟李海方、玉体近く亂れ入り帝の御手と
 両方よりしつゝの取り、后夢共わさまへず、天罰知らずの大悪人御恩も冥加も忘れしのと

絶り給へば、己とても助けぬと、取て突のけ氷の利劔と御胸に指あつる、君の怒れる龍
 眼に御涙のけながら、實刃のさびの刃より出て刃とくさらし、檜山の火の槍より出て槍
 とやく、あだも情も我が身より出るとい、今こそ思ひ知られたれ、鄭芝龍吳三桂が諫めと
 用ひず、己等が諂いにたぶらのされ、國と失ひ身と失ひ未代に名と流す、口にあまき食物
 の腹中に入れて、害とあすと知らざりし我が愚のさよ、汝らも知る如く夫人が胎内に十月に
 あたる我が子有り誕生も程有るまじ、月日の、光と見せよし、せめての情と斗にて、御
 涙にぞくれ給ふ、成らぬく、大事の眼と刮出したの何のため、忠節でも義理でもない
 、君に心とゆるさせ韃靼と一味せん爲、晴一つが知行に成る、君の首が國に成ると取て引
 よせ、御首と水もたせらす打ち落し、李海方此首の韃靼王へ送るべし、汝の后とあらめ
 來れと云ひ捨て、寄せ手の陣へを驅入りける、司馬將軍吳三桂敵あまた討ち取り、なんな
 く一方切りひらき君と落し奉らんと、立歸れば南無三寶、御首もなき尊愍あけに成て臥給
 ひ、李海方后とあらめ引立ち、さうまひ所へ出合ふたな、我君の用ひ軍齋にこそ外れたれ
 、非時とくはふと飛びのり李海方がまつらう、二つにさつと切わつて后のいましめ切り

ほつき、涙ながら尊骸とおしなとせば、代々に傳へる御國もづり御即位の印のるんじ御
肌におけられたま、有がたし是さへ有れば、御誕生の若宮御位心安しと、鎧の肌押し入
れ一先后と御供せうの、先御のらだと秘そうのと、難儀の二つ身一つ打くだらんと敵の
勢、一度にきつと亂れ入るさしつたりと切拂ひ、こみ入ればなぐりたて打伏せまくり
立て、走り歸つて今のは是迄事急なり、御死骸の兎も角も一大事の御世繼と、後の手引立
出れば此比生れし我水子、乳房と慕ひわつと泣、邪魔らしい去ながら、己も我が世繼ぞ
と引よせて戦の柄に、しつゝと結付こりや、父が討死するならば成人して若宮に忠臣のね
つぎとなれ、我らが家の木まふりと振のたげてぞ、落人と切とめんと、敵の兵したひよ
れば踏とまり、切捨て打捨て引しほのいさうの港に着にける、是よりたいす府へ渡らん
と、見れども折ふし舟一艘も、なきさにそふて立たる所に、四方の山々森のうげ、打のく
る鉄砲のよこぎる、雨の如くなり、吳三桂の實能鎧飛くる玉とうけとめく、后と覆ひの
こへ共運の極や胸板に、はつしと當り玉の緒も切れてあへなく成給ふ、吳三桂もはつとは
あり前後にくれて立たりしが、御母后の是非もなし十善の御子胤と、胎内にてやみくくと

泡となさんも云ひ甲斐なしとて劔ぬき持て後の肌へかしくつろげ、脇腹に押當十文字にさ
き破ればちしほの中の初聲の玉の様成おのこ親王、嬉しも嬉し悲しも悲しやる方涙に母后
の袖引ちぎり押つゝみ、抱き上しが待て暫し、取巻たる四方の敵死骸と見付、若宮と秘し
取たりと行未迄さがされて、宮とぞだてん様もなしと、つくと思案し、我子引よせ衣し
やうとはぎ、宮に打つけまいらせ劔取なし、水子の胸先指通し、後の腹に押入あつ
ばれ己のくのはう者、よい時生れ合せて十善天子の御身がはり、であしあつた出のいたし
やばの親に心残りな、親も心の残りぬぞと云へ共残る浮なぞり、鎧の袖に若宮と、包む涙
にむせ返り別れ行くこそ哀なれ斯くとい知らず、柳歌君梅檀女といさなひ、みなと口迄
落のびしが前後に敵みちくたり、是迄ぞのがるだけと、繁る蔭間とさわわけて身と
忍びてぞ隠れ居る李踏天が侍、大將安大入、手勢引ぐしとつと駈奇、今の鉄砲たしのに后
の吳三桂に當つたと覺へしと、あたりと見廻しこりや見よ、后としとめたり、腹と切り
ささ、懐妊の王子迄ころした、忠節立する吳三桂、主君と捨名と捨て命惜いの、さやの
人前すたつた、此上の彼が妻の柳歌君、梅檀女と尋るばり眼とくばれ高名せよと、四

方に別れ走り行く、中にもがうだつと云ふがむしや者、いで梅檀女と召取一人の手柄にせんと、鎧の上に簀打のけ、あまの小舟に竿さして入ぬくと漕廻り、此薦の蔭が氣遣ひなと押分る櫂のさき、柳歌君しつゝの取り方にまのせ跳返せば、舟縁と踏はつし俯伏にうつはど沈み、浮揚らんとする所と櫂も折よとたゝみわけ、打ば沈み、浮めば打、息もつゝせす泥龜の、沈と泳ぐが如くにて水底くゞり落ち失けり、き、無用の扱のけ殊に舟迄仰付られた、渡りに舟との此事と、船中にのくし置たる劔取て横たへ、梅檀女とのせ參らせ我も乗らんとせし所に、何處より跋わがりけん、がうだつ鎧もぬれしづく、戦ひつさげて廿騎斗餘すましと追のくる、いそがしや御覽候へ、敵手ひそく追のくれば暫しふせぐ其間、船底に隠れましませと、拾ひし劔と腰の劔二とうにふつて待のけたり、がうだつ程なく駈付けにつくい女め、櫂でぶつた返報と、長柄の戦追取のべて突つゝくる、き、そつちのら當がふた此劔こつちのらも返報と切て廻れば廿餘人女ひとりに切立られ、陸にまどへるあしべの鬮一羽もたゝす討るも有、いたでと受て逃るも有、柳歌君も、がうだつも、する所のふの手わけに成て一村あしと押分く、追入追込互のまなこに血の入たり、前後もわらぬ涙

打きしの岩角切先に、雷光石火の命と限り危のりける有様也、がうだつ戦も切折られ、膝行寄つてひんずと組柳歌君が持たる劔、もぎ取らんくとねぢ合ふ足と踏ためず、のけさまにうつはと伏直に乗てのつゝり、指通しく首ふつ、とのき切て、はつと笑ひし心の内嬉しさ類ひなりのけり、なふく姫宮様お身にの負傷もなつたの、舟の其儘そこにあると、隠ひ寄つて此體での船中のお供のならぬ、又敵が寄せ来ればもうとふも叶のぬ、潮にまのせいづく迄も落ち給へ、沖へ舟の出るまでの此女が陸にひのへた、敵何万騎よせたり共命限り腕のぎり、去りながら主従二度の対面は縁と命斗ぞや、随分御無事でく、南無諸天諸佛別して八大龍神万乗の君の姫宮の御舟と守護し給へやと、舟ばり取ておし出せば、折しも引しほの名残と何と梅檀女、涙しぼる、汐風に龍神納受のおきつゝのせ、沖とはるのに流れ行くあら心やすや嬉や、よし此うへは生き延びても我身一つ死でも誰と友らどり生死の海は渡れ共、夫の行衛子のもくる、君が行衛はればつゝの波のうき世の海と越へるねし、渡りるねしと云はく云へ、此一心のはや手舟、仁義の櫂櫂武勇の楫は、折つても折れぬおきつ波寄せくる時の聲をとて、劔に絶つてたぢくく、よろく隠ひよる方の、

いと山おろし松の風亂れし髪とさき上て、あたりと白眼んで立たりし、和漢女の手はん紙筆にも、寫しつたへけり

第四 はまづたひ

縹緖たる黄鳥丘隅にとゞまる、人としてとゞまる所にとゞまらずんば、鳥に如ざるべしと
あや、爰に大日本肥前の國松浦の郡、平戸の郷に釣たれ網引世と渡る、和藤内三官と云ふ
若者有り、妻も同じ海士の業藻にすむ出の我のらと、仲人なしの手枕にくゝり枕としめ合
し、小むつと云へる名にめで、世と睦まじく暮しけり、抑この和藤内が父はもと日本の者
ならず、大明國の忠臣、大師大爺鄭芝龍といつし者なりしが、くらき帝と諫めね自長沙
の罪とさけ、此日の本につくしがた老一官と名と改め、浦人に契りよこめ此男子と設けし
ゆへ、母が和國の和の字と用ひ、父は唐人唐の聲とつたをて、和藤内三官と名乗り、廿
餘年の春も立ち秋も過行く十月の、小六月迎あたゝるや、備中鉾にめかて提げ身の活計と
夕なぎに、夫婦つれ立出にけり、見はたせば沙頭に印とささむ嶋、沖洲にすたく浦千鳥潮
の干満とすき返し蛤ふんで色々の、あいでり、小裾しよぼくぬれて、拾ひし貝のな

くぞ寄生蟲、小螺子蛤子貝、汐吹あげの藤貝、ちらと見染し蟹貝に、一筆書て送りたい
らき口明て、はやく笑ふ赤貝に、心よせがい、こいたら貝、君のすがいと吸付けど、我の
腹の、片思ひ、憎やそもじの蟹螺に、喰せたいぞや榮螺貝、むすめの花貝さくらがい寝も
せで一人あのにしの、誰と待てとや、人の見るくい忘貝、我ふたりねの床ふしに身に蛸貝
いわひがい、門出よしの螺貝の、悦びの貝とぞ取りにける、中に一つの大蛤日かげに口と
打ひらき、取る人有りとも白泡の汐と吹てもりわけし、實や蛤よく氣とはいて樓臺とな
すと云ひしも、斯やと見とれいる所に、磯のもくづに飛渡りあさる羽音おもしろく、おり
る鳴のさつと見付、昔いらし只一啄と狙ひよる、云はれぬ鳴殿、看經もする身で
是がほんの殺生とい、蛤も蛤口とくはつと破戒無漸飛ついでちくく、つゝく所と貝
合にしつらと喰しめ動かせず、鳴の俄に興さめ顔引つしやくつ、羽たさし、頭とよつて
岩根によせ打くだらんず鳥のちゑ、蛤の砂地の得物汐の溜へ引込まんと、尻下りに引入る
は翻と張てばつと立、一丈斗あがれ共つられ落て、又立上り、はつと立てのころりと落、
鳴のはねがさも、はがさ毛とさる立てぞ諍ひける、和藤内つくく見て備中鉾のらりと捨

面白し、雪折竹に本来の面目と悟、ひちと切て祖師の西來意の輪をひらきしも尤も
 な断りのな、我父が教によつて唐士の兵書と學び、本朝古來名將の合戦勝負の道理と考へ
 、軍法に心とゆだねしに、今鳴蛤の聲によつて軍法の奥義一時に悟りひらけたり、蛤は
 貝のたきと頼んで鳴の來ると知らず、鳴は箭の鋭にはこつて蛤の口を閉ると知らず
 、貝のはなさは鳴のはなれんど、前に氣とはつて後と返り見るに隙なし、爰に望んで我
 手も罷さず二つと一度にひつ掴むにいとやすく、蛤貝のたきも詮なく鳴の嘴のとびも
 ついに其徳なるべし、是ぞ兩勇たゝのりしめて其虚と討と云ふ軍法のひみつ、唐士に
 秦の始皇、六國と呑んだる連衡の謀、本朝の太平記と見るに後醍醐の帝、天下に王とし
 て蛤の大口ひらきし政取しめなく、相摸入道といふしぎ鎌倉に羽たゝさし、奢の箭する
 ぞく吉野ちはやに潮と吹せ申せしに、楠正成新田義貞二つの貝に箭と閉せめられ、む
 しり取たる其虚に乗てうつせ貝、蛤共に掴しつゝ物の高氏將軍武略に長せし所也、誠や
 父一官の生國は大明鞋靴、鳴蛤の國諱ひ今合戦さい中と傳へ聞、あられ唐士に渡り此理と
 以て彼理と推し、せめたゝるふ程ならば大明鞋靴兩國と一番にせん物とぞ、目もはなさず

工夫とこらし、思ひろめたる武士の一念の末を過しき、理のな此おのて唐士に押渡り、大
 明鞋靴と平均し異國本朝に名とわけし、延平王國性爺は此若者の事成けり、小むつ遠めに
 なふくもう沙がさいてくる、何とさよるりとしてぞいのと走り寄て是は扱、鳴と蛤と口
 吸ふの女夫といふ事今知つた、どうやら犬の様で見共ない、どりや放して取らせふと頭并
 むいて口押われれば、鳴も悦びあしべと指して満くる沙に蛤の、則隠れしづみけり

めろことめぬ

時雨ふないさ歸らふと、見やるすさきに楫とたへ揺れよる珍しい作りな船、鯨舟で
 もなし、唐の茶舟の何じや知らぬぞ舟ぞこ見れば、唐士人と覺しくて二八余りの上郎の、
 ふよりのらんばせ柳のまゆ袖は涙の沙風に、化粧もはげて面やせて、哀にも美しく雨にし
 はれしはつ花に、目はなと付しとく也、小むつ小聲に成わりや繪にのいて有唐の後、いた
 づらして流された物じやわいの、さうじやくよい推量おれは悪ふ合點して、揚貴妃の
 幽霊のと思ふてこはつた、何でも能女房じやないのいな、まひやらし唐の女房が目付
 くの、親父様が始の様に唐にござつて、こなたも彼處で生れたら、あの様な女房抱いて寝

さしやらふが、日本に生れた因果にわしが様な女房持て口惜らふの、ひよんなどまじり、なんぼう美うても唐の女房の、衣装付あたま付、辨才天と見る様で勿体なふて氣がはつて、寝られぬせぬとぞ笑ひける、其際に上臈濱邊にありて夫婦と招き、日本人く、なむさやらちよんのふどらやあくくと有りければ、小むつふつと笑ひ出しありや何といふお経じやと腹どらへておろしがる、よく笑ふあれの日本人爰へおじや、頼たいと云ふ事と押のけて立よれば、上臈涙にくれながら、大明ちんしんによろ、君けんくるめいたのりんのんさう、さいもろすがすんへいする共こなたのりんとんな、ありしてけんさんはいろ、とらやあくくと斗にて、又さめくと泣給へば小むつひ濱邊にころりと臥腹筋よつてたへぬる、和藤内はつねく父が詞の唐韻覺へ、はつと手とつき頭と下げ、うすくうさすはもう、ささがらんぶりのくさんさんないろ、さんにやうくと手と打て、互にしみる手と取くみ、悲歎の涙陸まじし、小むつひつとせき上げ胸ぐら取て是男、唐人詞聞たふない、如何にいたすらすれば迎いつの便宜に唐三界、あんなりな稼ぎじや、やい其處なとらやあや、このちの大事の男とよふもくさんにやうくにしたなあ、日本の男の

鹽梅はすふて見る事も成まい、此鹽梅くふて見よと備中鍛ふり上れば和藤内ひつたくり、目とわいて愔氣せい、是こそ日比語りし父一官の昔への主君、大明の帝の御妹梅檀皇女、國の亂にて吹ながされ給ふとの御物語見捨てたなく悼し、直に我家へお供せば庄屋のとほり代官所の詮議なんのものと罷し、とく親父と談合おぬしは内へ返つて早々はへ同道せい、人の見ぬ中はやうくと云ひければ小むつひはつと手と打て、扱もくかいとしや同じ日本の内さへも王位高貴の姫君は荒ひ風にも當ぬと聞く、増してや是は見ぬ唐土の王胤の淺ましき御姿や、所も多きに爰へお舟の寄とも、主従の御縁ふのさもへ、追付親父様呼ふでさせせう、お愛のとらやあや、さんにやうくと涙にくれ家路にころは歸りけれ斯とは知らず一官夫婦不思議の瑞夢蒙りしと、當國松浦の住吉に詣ふで歸るさの濱づたひ、なふくと聲とあけて招きよせ、梅檀皇女亂國と脱れ御舟是へ流れよる、悼ひしき有様と聞きもあへず一官夫婦、あつと頭と地ふ付て、御聞及びも候はん某は昔への鄭芝龍と申者、只今の妻や子は日本の者にて候へ共、舊恩と報せずんば忠臣の道立べならず、某こそ年よつたれ此世倅兵事軍術と嗜、御覽の如く骨ぶとに生れ付き大膽不敵の強力者、

今一度大明の御代にひる返し、冥途にまします先帝の宸襟と安んじ奉らん、御心やすく思召せと世に頼もしく申上れば、皇女御涙にくれ給ひ、扱の聞及びたる鄭芝龍との御身よの、李踏天が悪逆縫鞆國と心と合せ、兄弟と失ひ國とらばひ、妾も既に害せられんとしたりして、吳三桂夫婦の臣が介抱にて今日の今迄惜らぬ露の命のつれなさと、頼むと斗の給ひて、又さめくと泣給ひ、互に通ずる詞の末、縁につるれば唐のもの海の八千たひ繰のへす、昔語ぞ哀成り、母も決としぼりのね實に誠のやうのこと承らん印にや、今朝曉夫婦のはらぬ夢の告、軍の二千里と出て西に利有といふ事と、まざくと見て候、和藤内、此夢と考君御出世の忠勤とはげむべし、如何にくと有ければ和藤内謹んで、只今某此濱にて鳴の鳥と蛤希代のわざと見受しより、軍法の蘊奥と悟ひらいて候、千里と出て西に利有とい、大明國は我國より西に當つて千里の波濤、軍法の法の字の散水に去と書、散水の水也水と去との此出汐の水に任せ、はやく日本の地と去べしとの神の告、我らが本卦師の卦に當て、師は軍の義也、坤上坎下の卦体、二陽と以衆陰とすぶるといつは、我一身と以數万騎の軍兵と從へたもつ大將、今散水のさす潮に早く日本の地とさつて南京北京に

押渡り淨世にながらへ有るならば、吳三桂と軍慮と合せ李踏天が賊徒と亡し、軍勢催し鞆鞆へ逆よせに押し寄せ、鞆鞆わたまの芥子坊主、ねぢくびつらぬき追ふせきりよせ、御代長久の凱歌と上げん事、和藤内が心魂に徹する所、天の時地の利に如す地の利は人の和にしろす、吉凶の人によつて日によらず、此儘直に御出船道すがら島々の夷とあらひ、案の中成る軍せん御出陣と勇し、三韓退治の神功皇后臚舳に立しわらみささと今見る如き威勢なり、父の大きに感心し、潔よし頼もし、誠や一粒の花の種の地中にくちす、遂に千輪の梢に登といふ本文、實に一官が子成るぞや、我々夫婦も同船にて御供申べきが、大勢の目に立て所々の渡海の番所、國のとがめ恐れ有、夫婦ひそのに藤津の浦より出船すべし、おとは是より乗出し便よき小島に姫宮と預け置き、船路とらへて追付けよ、親子が忠心正直の頭にやぶる神風は、船中何の氣遣なし、出合ふ所は唐土に隠れなき、千里が竹にて相待べし、急げくと姫宮にお暇申し。夫婦は遙に別れ行く、和藤内姫宮の御手と引、もとの唐船にうつし乗せ参らせ、押出さんとする所に、女房息とさつて走付、船のとも綱しつのと取、内に親父様母様も皆お留主、いな事と思ひしに道理こそ是じや物、親子

とつくと談合しめ、親御の國をらお内義よび、此小むつと置きざりに親子夫婦四人づれ、唐へ身體引氣じやの、あんまり残酷つれない、なんの見落しおちが有、唐高麗のあろの事天竺雲の果迄も、共に進んと云ひのりした二人の中、仲人もない挨拶ない二人が胸と胸とに、起請も誓詞もおさめて有、なんぼう厭れた中成り共今迄の情に、せめて同舟に乗せ、五里も十里も沖なの波に沈めて、沙魚や鰈の餌に成り共、夫の手をら殺て下され藤内殿と、舳板とたゝき泣くとき放さん氣色はな有りけり、大事の門出不吉のはへづら、其處立のけ目に物見せんと擺ふり上れば、姫宮あひて絶り付、留め給ふと押のけ欄も折れよと舟端たゝき、脅しに打と身に受て、打れて死ば本望と濱邊あせうと臥まるび聲も、惜ます歎きしが、是でも死なれぬな、よし〜今は是迄結構者もとによる、此海底に身と沈め眞悲のしつとの大蛇と成て、もとの契りの今日の仇今に思ひ知らせんと、石と袂に拾ひ入れ岩はの肩によち登れば駈あがつて和藤内抱きとめて、こりや粗相すな、心底見付た、軍なのばの大明國事大平に治る迄、姫宮と汝に預日本に留め置んと思へ共、筋なき女の心と窺ひ態つれなく見せたるぞ、是四百餘州とつりがへの姫宮としつのと預置のらひ、男

の心のはらぬ證據、姫宮に仕へ奉るは眞に孝行夫につるふる百倍ぞや、命にのけて頼み入國治て迎ひの御舟のお供せよと、宥むれば聞入て此方には氣遣せず、随分無事でござれやと、いへ共よはる女心責て一夜のらくともせず夢見た様な別れやと、夫の袖に絶り付わつと斗に泣きさけふ、心の内ぞやるせなき、和藤内も胸ふさがり、至極の思ひに目も暗み共に心は亂るれを斯ては果じいざさらば、く〜くの、暇乞梅檀女も涙ながら、追付迎ひの輿と待、其時伴ひ歸るべし必早ふとの給へば、畏て和藤内泣く〜舟と押出す、又とも綱に取付て云ひ残せしとの有、暫くのと引とむる、そ聞分なしと引切て舟とふらみに漕出せば、詮方波に身とひたし、只手と上て舟よなふ、舟よと呼べと出舟の、あいなさ殿に駈上り、足とつま立のび上り、見送る影も遠ざかる、唐土の望夫山吾朝のひれふる山、今の我身の我が思ひ、石共なれ山共なれ、動るじ去らじとさくとき涙限聲限、互に寄れば招られて姿と隠す汐ぐもり、聲とへだつる沖津波、沖ののもめ磯ちどり泣きこがれてぞ

千里が竹

別れ行く舟路のすゑも、知らぬ日の、筑紫は雲に埋めども、跡に應護の神風や、千波万波

と押しきつて、時も違へず親子の舟、唐土の地にも着にけり、鄭芝龍一官は古郷へ歸る唐錦裝、東引のへ妻子に向ひ、我本國と云ながら時遷り代のはり、天下悉く李踏天が引いれて、韃靼夷の奴と成り、昔の朋友一族とて誰と尋ん様もなく、司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れざれば、何と以て義兵の旗と上げ、何國と一城に楯籠るべき所もなし、然るに某去る天啓五年此國と立退、日本へ渡る時二歳に成りし娘の子と、乳母が袖に捨置しが其子が母は産落して當座に死す、斯云ふ父は八重の汝路の中たへて、いつ父母も知らぬ身が育てば育つ、草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻と成由商人の便に聞及ぶ、頼む方は是斗り、親と慕ふ心有て娘さへ承引せば、聲の甘輝もやすくと頼まるべし、是より路の程百八十里、打伴ては人も怪しめん、我一人道とのへ和藤内は母と具し、日本の獵船の吹流されしと、頓智と以て人家に憩ひ追付べし、是より先は音に聞ゆる千里が竹迎虎のすむ大敷有り、それと過れば尋陽の江、これ狸々の住所、風景ろびるし高山は、赤壁迎、昔東坡が配所ぞや、夫よりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし、其赤壁にて待捕へ、万事と示し合すべしと、方角とて

も白雲の、日影と心覺へにて東西へこそ別られけれ、效に任せ和藤内人家と求め忍ばんと、甲斐しく母と負たつきも知らぬ岩がんせき、古木の根きし瀧津波、飛こへはねこへ飛鳥の如く急げ共、すへ果しなき大明國、人里たぬて廣々たる千里が竹に迷ひ入、和藤内はうと我とぬるし、なふ母者人、此脚骨に覺へ有り、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にもあふ事の、行けば行く程敵の中合點たり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなふるよな、魅さば魅せ宿なし旅の行付次第、小豆の飯の相伴と根笹大竹押分け、踏分け猶奥深く行先に、怪しや數万の人聲せめ鼓、せめ太鼓、喇叭、笛、高音とららしひやうくと、ころ聞こへけれ、すは我と見咎めて敵の取まく攻太鼓の、又は狐のなすわざのと忙然たる其折ふし、空凄然風おこり、砂と穿ちどらうと、竹葉さつと巻き立くと吹き折る、竹は劔の如く凄然となん共おるの也、和藤内ちつ共臆せずよめたりと、扱は異國の虎狩な、あの鐘太鼓は列卒の者、爰は聞ゆる千里がはら、虎嘘ふけば風起る猛獸の所爲と覺へたり、廿四孝の揚香は孝行の徳によつて、自然と脱れし惡虎の難、其孝行には劣る共忠義に勇む我勇力、唐へ渡つて方始神力をすくと日本力及でむるふは大人氣なし、虎はあるの象で

も鬼でも一挫ぎと尻ひとつのらげ身騰ひ母と圍ふて立たるは、西天の獅子王も、恐れつべうぞ見へてけり、案に違はず吹風と共に荒たる猛虎のめたち、藤根に頼とすり付く岩角に爪とき立、二人と目がけ睥のゝる事共せず、弓手に擲り馬手に受、振つてのくれれば身とのはし弛めば、ひらりと乗うつと、上に成り下に成り命くらべ根比べ、聲と力にゑいゝく、虎の怒り髪怒り聲山も崩るゝ如く也、和藤内も大わらは虎も半分毛とむしられ、雨方共に息つゝのれ石上につゝ立ば、虎も岩間に小首となげ、大息つゝいだる其響き、風櫃吹が如くなり、母敷のげより走り出、まゝ和藤内、神國に生れて神より受し身体髪膚、畜類に出合ひ力だてして負傷するな、日本の地は離るゝ共神は我身に五十鈴川太神宮の御板納受なごのならんやと、肌守りと渡さるれば實に尤と押いたいさ、虎に指むけさしあぐれば、神國じんひの其不思議猛りに猛る威勢も、忽尾とふせ耳とたれ、じりゝゝと四足と縮め、恐れわなゝき岩洞に隠れ入る、おつゝと摺んで跳返へし、打伏くゝひるむ所とのつゝのゝり、足下にしつゝと踏へしは天のふちごま素鳴蓋みとの神力天照神の威徳ぞ有難さ、斯る所に列卒の者群り來る其中に、大將と覺しき者大音上、まゝ已奴は何國の風來人、我

が高名と妨ぐる、其虎は忝も主君右軍將李踏天より、韃韃王へ献上の爲狩出したる虎なるぞ、早と渡せ異議に及ばず打殺さんしやぐはんゝと喚きける、李踏天と聞よりも願ふ所と笑盡に入、まゝ餓鬼も人数しほらしい事はさいたり、身が生國は大日本風來とは舌長し、左程欲がる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら石花菜とやら、爰へつき出し詔とさせい直にあふて用も有、さもない内はぬゝなとならぬゝと睨付る、ま物ないはせを討とれと一度に劔とはらりと抜く、心得たりと守りよ、虎の首にのけ、母の傍に引据れば繋きし如くに劔のす、ま、心易しと太刀さしゝのさし群る中へ割て入り、八方むじんにわりたてゝなでまくる、列卒の大將安大人官人引ぐし立歸り、おのれ老ぼれ餘さじと一文字に切懸るゝ、猶も神明應護の印神方虎に加ゝつて、むつくと起て身慄し、敵に向ひ齒とならしたけりうなりて飛のゝる、こは叶はじと安大人列卒の者がさいたる劔、ありはこ數鎗手に當ると申になけ付く打のくる、虎は神力しさいとゑ、劔と宙にひつくはへゝゝ、岩に打當徹塵になす、刃の光玉ちるあられ、氷と碎くに異ならず、打物つくれば官人共色めきたつて逃まゝと、後より和藤内とつこい遣らぬと顯れ出、安大人がろつ首と摺んで指上げ、くるゝ

と振廻しゑいやつと打付けば、岩に熟柿と打つ如く五体ひしげて失にける、此威勢に官人原跡へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内二王立につゝ立たり、く申御堪忍、御免くゝと手と合せ土に喰付き泣るたる、和藤内虎の脊となで、己奴等が小國連侮る日本人、虎さへ恐がる日本の手並覺たる、我こそ音に聞へたる鄭芝龍老一官がせがれ、九州平戸に成長せし和藤内とは我事也、先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり合、三世の恩と報せん爲め、父が古郷へ立歸り國の亂と治也、命惜くば味方につけ、否といへば虎の餌食、否の應ると詰らるゝ、何の否でござりましよ、韃靼王に従ふも李踏天に従ふも命が惜さ向後おまへのは家來共、お情願奉ると地に鼻付て畏るゝ、でのしたく去りながら、我が家來に成るうらは日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使のんと、指添の小刀はづさし是も當座のはや剃刀、母も手々に受取て、並ぶ頭の鉢の水揉や揉すに無理むたい、片はし剃やらこぼつやら、糸びんあつびん剃刀次第、またく間に剃仕廻二櫛半のはらけがみ、頭は日本髭は韃靼身の唐人互に顔と見合せて、頭ひやつく風引て、くつさめく、村さめくど涙と流すぞ道理成り、親子どつと打笑ひ、勘ひも勘た供廻り名も日本に改めて何左衛門何兵衛

衛太郎次郎十郎造面々が國所、うららじに名乗二行に立てはつたて承りゆと、お先手の手よりの衆ちやぐらう左衛門東浦塞右衛門、呂宋兵衛東京兵衛、暹羅太郎白城次郎ちやるなん四郎はるなん五郎うんすん六郎すん吉九郎、もうる左衛門じやが太郎兵衛、さんどめ八郎いざりす兵衛今參のお供先、跡に引馬とらふのこま、母と助けて孝行の、名と取口取國と取譽の、異國本朝に、踏またげたる鞍あふみ、虎の脊中に打乗て威勢と、千里に顯せり

第三

仁ある君も用なき臣の養ふと能わす、慈有る父も益なき子の愛すると能はず、大和唐土さまくに道の巷の別るれど、迷いで急ぐ誠の道赤壁山の麓にて、親子三人巡り合我が鐘と斗り聞及ぶ、呉將軍甘輝がやのた城獅子が城にぞ着にける、聞しに優る要害の未だ復塞る春の夜の霜に閃く軒の瓦魚虎天に懸ふりて石壘高く築上たり、堀の水監に似て繩と引が如く、未は廣河に流れ入り櫻門堅く鎖せり、城内には夜廻りの銅羅の聲喧すしく、箭密に弩隙間なく、所々に石火矢と仕掛置さすはといは、打放さん其威勢和國に、目馴ぬ要

害なり一言案に相違し亂世といひ、斯る嚴き城門とく敷、夜中に殿き聞もなれぬ舅が、日本より來りしなんといふ共誠と思ひ取次者も有まじ、たとへ娘が聞たり共、二歳で別れ、日本へ渡りし父と如何成證據と有たる共、容易城中へ入れんと難あるべし如何はせんとを躡さける、和藤内聞もあへず、今更驚とならず一身の外味方なしとは、日本と出る時より覺悟のまへ、遂に見ぬ舅と聲よと親みだてして、不覺と取らんより頼まれうの頼まれぬの一口商ひ、否といは、即座の敵、二歳で別れし娘なれば我ら共行合姉、彼奴孝行の心あらば日本の風も懐しく、文の便も有べきに頼まれぬ心底、我竹林の虎狩に從へし島夷と、軍兵の元手にして切靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付り隙いらす、なんの人頼み此門蹴破り不孝の姉が首捨切り、聲の甘輝と一勝負と、踊り出れば母縫り付押し止め、其娘御の心入は知らぬ共、夫につれて世の中の儘に成らぬは女の習ひ、父とは親子御身とは種ひとつ、他人は自一人にて海山千里と隔て、も、繼母といふ名は脱れず、娘の心に親兄弟戀慕ふまい物でもなし、其所へ切こんで日本の繼母が妬みなりと云れん、我が恥斗りの日本國の恥、御身不肖の身と以て鞆鞆の大敵と攻破り、大明の御代に返さんと大義と思ひ

立つのらは、私の恥と捨て我が身の無念と堪忍し、人々懐け從へ一人の繼兵も、味方に招き入るこそ、軍法のもと、聞、増して婿の甘輝は一城の主、一方の大將是と味方に頼むと大のたにて、成べきの心と脩め案内せよと制すれば、和藤内門外に大音上、吳將軍甘輝公直談申度事有、開門くと殿さしは城中響く斗也、當番の兵士聲々に、主君甘輝公は大王の召によつて、昨日より出仕有りいつ御歸りも計られず御留主といひ夜中といひ、何者なれば直談といひ推參至極、いふ事有らば夫のら申せ、御歸りの節披露して取らすべしとぞ呼はりける、一言小聲に成いや人傳に申事ならず、甘輝公の留主ならば御内室の女性へ直に逢ふて申べし、日本より渡りし者と申せば合點の有はずと、云ひも果ぬに城中騒ぎ我々さへ面も拜まぬ御臺所、對面せんとはふてき者殊に日本人とや、油断するなと高ちやうらん銅羅にやう鉢と打立、へいのうへには數多の兵銃炮の筒先をへ、石火矢はなして打みしやげ、火なほよ玉よとひしめさける、奥へ斯とや聞へけん妻の女房樓門にのけあがり、騒ぐなく、聞届て自がそれよと聲とある迄、鉄炮放すな粗忽すな、ちく門外の人々、吳將軍甘輝が妻錦祥女との我事、天下悉く鞆鞆の大王になびき、世に從ふ我夫も

大王の幕下にしよくし、此の城と預り守り嚴き折もあり、夫の留主の女房に逢んと心
得ず去りながら、日本と有れば懐愛し身の上と語られよ、聞まはしやと云ふ中にも若や我
親の、何故尋給ふぞと心もとなさ雲踏さに、懐愛さも先立て兵共粗相すな、むざと鉄炮放
すなと心遣ひを道理なる、一官も始て見る娘の顔もおぼる月、涙に曇る聲と上げ、粗忽の
申事ながら、御身の父の大明の鄭芝龍、母の當座に空しく成り父は逆鱗被ふり、日本へ身
退く其時の二歳にて、親子名残のうさ別れ辨へなく共乳母が噂、物語にも聞つらん我こそ
父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年と經て、今の名の老一官日本で設けし弟の此男、
是成る今の母、ひそかに語り頼度事有て、成り果し此姿耻とつ、ます來りしぞ、門と開
あせたべのしと染染くぞく詞の末、思ひ當りて錦祥女扱の父のと飛かりて、絶り付たや顔
見たや心の千々に亂るれぞ、流石一城の主甘輝が妻、下々の見る所涙とおさへて一々覺へ
有事ながら、証據なくての胡亂也、自が父と云ふ、証據あらば聞らまはしと、いふより兵
口々に証據く、証據と出せく、親子と云ふより別にのつた証據もなし、そりや曲
者よと鉄炮の筒先、一度にばらりとつ、うくる和藤内へけへだて、無用の鉄砲、ばん共い

かせばなで切にしてくれん、イヤしやつめ共にのがすなと火ふたと切て取のこみ、証據く
とせめりけて既に危く見へけるが、一官兩手と上て、是々、証據のそつちに有るはづ、一
とせ唐土と立退く時成人の後形見にせよと我形と繪にうつし、乳母に預置つるが、老の姿
ののる共面影残る繪に合せ、うたがひとはれ給へ、なふ其詞がはや証據と、肌に離さぬ姿
繪とらうらんに押開らさ、柄付の鏡取出し月にうつるふ父の顔、鏡の面にちるくと寫し
取て引きくらへ、引合せて能々見れば繪にとめし往昔の、顔も艶あるみどりのびん鏡
の今の老やつれ、頭の雪とわれ共おはらで残る面影の、目元口元そのまゝに我影にもさ
も似たり、父方譲りの類のはくる、親子の印うたがひなし、扱ての誠の父上の、なう懐愛
や戀しや母の冥途の苦の下、日本とやらんに父上有りと斗りにて、便と聞ん知邊もなく、
東のはてと聞ららに、明くれば朝日と父ぞと拜み、暮れば世界の圖とひらき是の唐土是は
日本父の愛にましますよと書圖での近いやうなれど、三千餘里の彼方とや此世の對面思ひ
たぬ、若や冥途でもふ事もと死なぬ先から來世と待、歎きくらし泣わのし廿年の夜るひる
の、我身さへつらうりしよふ生て居て下さつて、父と拜む有がたやと聲も惜まぬ嬉し泣、

一官のむせ返り樓門に縋り付見あぐれば見おろして、心あまりて詞なく、つきぬ涙をぬれなる、武勇にはやる和藤内母諸共に伏沈めば、心なき兵もこぼす涙に鉄炮の火繩もしめるば有りなり、や、有て一官我々是へ來ると、響の甘輝とひそくに頼み度一大事、先々御身に語るべし門開のせて城内へ入れてたべ、喃仰なく共是へと申等なれ共、此國未だいくさならば、韃靼王の掟にて親類縁者たり共、他國者の城内へ堅く禁制との掟なり、され共是の格別こりや兵共、如何せんと有りければ了簡もなき唐人共、いや／＼思ひもよらぬとならぬ／＼、さこらい／＼、びんくはたさつ、ぶおん／＼と又鉄炮とさしむるへば、人々案に相違して呆れ果て、見へけるが、母進み出尤々、大王より掟と有れば力なし去ながら、年よつた此母に何の用心入べきぞ、あの姫に只一言物語する斗り、妾一人通してたべ誠浮世の情ごと、手と合せても聞入すいや／＼、女迎宥免せよとの仰はなし、然らば我を了簡して城内に有る中、細どあけて縛り置き繩付にして通せば、韃靼王へ聞へても主君の云譯我らが身ばれ、急いで繩のれよ夫がいやなら、さこらい／＼びんくはたさつ、ぶおん／＼とねめつくる、和藤内眼とくつと怒らし、毛唐人、己奴らが耳のぞこにつ

いて何と聞く、悉くも鄭芝龍一官が女房身が母、姫の爲にも母同前、犬猫と飼ふ様に繩付で通さんとの、日本人のどんなと聞いていぬ、小むづのしい城内いらひでも大事な、まごされど引立る母ふり放し、それ／＼今いひしと忘れし、大事と人に頼む身の幾度の様々の、憂目も有り恥も有り、繩られる足がせ手がせに／＼つても願ひさへ叶は、瓦に金とるもるが如し、小國なれ共日本の男も女も義の捨す、繩のけ給へ一官殿と耻しめられて力なく、用心の腰なり取出し高手小手に縛上、親子が顔と見合せて笑顔をつくる日本の、人のそだちぞ健氣成る錦祥女も、たへのぬる歎きの色と押つゝみ、何ととも時世にて國の掟は是非もなし、母のいみづのらが預るうへの氣遣なし、何ととの存せぬ共珍願ひの一通り、お物語承り夫甘輝に云ひ聞せ、何とぞ叶へ參らせん、扱此城の廻りにはつたる堀の水上の、自が化粧殿の庭より落る遣水の、末の黄河の川水とながれ入る水筋也、夫の甘輝が聞入て御願ひ成就せば、白粉といて流すべし川水白く流るゝの、目出度印と思召し勇んで城へ入給へ、又御願ひ叶はずば紅と解て流すべし、川水赤く流るゝの叶はぬ左右と思召、母御前と受取に西外迄出給へ、善悪二つの白妙と唐紅の川水に、心と付て御らんせよ

らば、くくと夕月に、門の戸とさつと押ひらき伴ふ母の生死のさうい、菩提門と引ひいて是の淨世のむみやうもん、貫の木てうをふるす音、錦祥女の目もくれて弱さの唐土女の風、和藤内も一官も、泣ぬが日本武士の風、大手の門の開閉に石火矢打の鞆風、一つにひやく石火矢の、音に聞さへ遙の成る、夢も通ぬ唐土に、あよへば通ふ親子のねん、恩愛の綱結び合い、結ぶあまりの縛繩のる例の異國にも、まれに咲出す雪の梅、色音のななじ驚の、聲にぞつうじいらざりし、錦祥女の孝行ふらく、母と奥の一間に移し三重の袴三重の布團、山海の珍菓名酒と以て、重んじもてなす有様の、天上の榮花共又高小手の警戒の十惡五逆の科人共、見る目いふせくいたりしく、様々に給仕へ誠の母と勞りし、心の内こそ殊勝なれ、腰元の待女共よりあつまり、何と日本の女子見ての、目も鼻も變らぬが可笑い髪のかげの結、あつた衣裳の縫様若い女子もあれであらふ、裾も襷もはらくはらくと、ばつと風が吹たら太股まで見へそうな、耻しい事じや有るまいの、いやくとても女子に生れるなら、こちや日本の女子に成たい、何故といや、日本の大きに和らぐ大和の國といふげな、何と女子の爲には、大きに和らふな好もしい國じやなひるいの、ま

有がたい國じやのと、眼と細めてぞ額さける、錦祥女立出是を面白そふに何いうぞ、彼方の自らのいなさぬ中の母上なれば、孝行といひ義理といひ誠の母よりかもけれ共、國のおきて詮方なく縛り擽めるおいとしさ、鞆靴王へもれ聞へ連合に詰責あらふのと、宥免も成りがたく、難儀といふは我身一つ、いづれも頼む食物もちがふとや、お口にあふ物うのふて進せてくれよとの給へば、いやや如才もなふお料理も念入、龍眼肉のお食、お汁の家鴨の油わけ豕のこくせう羊の漬焼、牛のうまばこ様々にして上ても、なふいまくしいそんな物いや、縛られて手も叶はぬ、つい握飯としてくれと御意なさる、其握飯といふ喰物の何の事やらとふも合點參らず、皆打よつて詮議致せば、日本では相撲取とひすびとやげな、それもへ方々尋ねても、折しも悪ふれ齒に合そな相撲取が、切物なりとぞやける、表にとろく馬車御歸館と呼つて、唐櫃先に身入させゆらくたる絹笠も、さすが呉將軍甘輝と名におふ其物體、錦祥女出むのひ何とて早き御退出御前の何と候ぞや、されば、鞆靴大王威感ふらく過分の御加増、十万騎の旗頭さんぎ將軍の官に任せられ、諸候王の冠装束たまひり大役仰付らる、家の面目これに過すと有ければ、それのお手

柄めでたいく、なふ家の吉事の重なる物、日來戀しい床しいと暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟頼み度事有りとして、門外迄來り給へ共お留主といひ、嚴き國の掟と憚り、男子の皆歸し母上斗りと留置しが、猶も上の聞へと恐れ繩とつけてあれあの、奥の亭にて御馳走の申せ共、胎内のらぬ母上繩かけし御心底、悲しきよとぞ語りける、繩かけしとのよい了簡、上へ聞へて云譯有り、随分もてなせいさ先我も對面せん、案内申せといふ聲の、もれ聞へてや妻戸の内、なふ錦祥女、甘輝殿のお歸りの爰の餘り高わがり、わらわのそれへと立出る形はいと、老木の松の、しめらされし藤のづら、立居苦き其風情、甘輝見る目もいたはしく、誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川万里とてへ給ふその甲斐もなき戒の、時代の掟是非もなし、それ女房お手がいたむの氣と付よ、優曇花のまれ人いさゝの鹿略と存せず、何事成共此甘輝が身に相應の事ならば、必心あるなと世に睦じくもてなせば、老母顔色打とけて、頼もしい悉い、其詞と聞のら何しに心置べきぞ、頼み入度大事ひろのに語り申たし、是へくと小聲に成り、なふ我々此度唐土へ渡りしと娘懐しい斗りでなし、去年の初冬肥前の國松浦が磯といふ所へ、大明の帝の御妹梅植皇

女小船にめされ吹流され、御代と鞍韉に奪れし御物語聞とひとしく、父は素より明朝の倍臣、我子の和藤内と申そ者賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書とまなび、鞍韉大王と亡ぼし昔の御代にひるがへし、姫宮と帝位に即んと先日本に残し置、親子三人此唐土へ來たれ共、淺ましや草木迄皆鞍韉に隨ひなびき、大明の味方に心さす者一人もいはず、和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿、力とそへて下されし偏へに頼み參らする、是が拜む心ぞと頼と膝におしさげく、只一筋の志ざし、思ひこふぞ見へにける、甘輝大きに驚き、扱の聞及ふ日本の和藤内と申は、此錦祥女とは兄弟鄭子龍一官の子息候な、武勇の程唐土迄も隠れなく、頼もしき思ひ立尤も斯こそ有べけれ、我らも先祖の大明の臣下、帝はるび給ひてより頼むべき主君なく、鞍韉の恩賞のうふり月日と送る折めら望む所の御頼み、早速味方と申度が少存る旨あれば、急にあつ共申されすつくと思案しお返事とぞ、いはせも果す、ろりや御卑怯な詞が違ふ、是程の一大事口より出せば世間ぞや、思案の間に漏聞へて不覺と取り悔んでもへらす、お恨とい思ふまじ成れ成らされお返事と、只今とせめつければ、急に返答聞たくは易いとく、いらにも吳將軍甘輝和藤内

が味方なりと、云より早く錦祥女が胸元取て引よせ、劍引ぬいで咽々るに指當る、老母あ
 けて、飛のり二人が中へわつて入り、持たる手とふみ放し娘と脊中に押やり、仰向
 に向さなり臥大聲上て、是情なや何事ぞ人に物と頼まれば、女房と刺殺すが唐土のなら
 ひの、心にろまぬ無心と聞くも、女房の縁有るもへと心腹が立てのとの、但の狂氣うたま
 く、始て来て見たる、母親の目のまへで殺そうとする無法人、日比が思ひ遣れた味方と
 せずばせぬ迄よ、今迄と違ふて親の有る大事の娘、これ恐いとない、母にしつゝと取つ
 さやと、隔ての垣と身と捨てのこひ欺けば錦祥女、夫の心の知らぬ共母の情の有がたさ、
 負傷あつばすなど斗りにて、共に涙にむせびけり、甘輝飛しさつて、御不審御尤、まつた
 く某無法にわらず狂氣にもいはず、昨日韃靼王より某と召、此比日本より和藤内といふる
 せ者、小僕下劣の身と以て智謀軍術たくましく、韃靼王と傾け大明の世に、驍さんと此土
 に渡る、それが討手誰ならんと數千人の諸侯の中より、此甘輝と選出されさんぎ將軍の官
 に任じ、十萬騎の大將と給ひる、和藤内と我妻の兄弟と今聞く迄の夢にもしらず、彼奴日
 本に傳へ聞捕とやらんが肝膽と出、朝比奈辨慶とやらんが勇力有る共、われ又孔明が

勝に分入り、樊會項羽が骨髄とつて一戦に追捲り、和藤内が月代首ひつさげて來
 らんと、廣言はさし某が一太刀も合せず矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば吳將軍甘
 輝が日本の武勇に、聞おぢする者でなし、女にはだされ縁にひられ腰が抜て弓矢の義と忠
 れしと、韃靼人の雑口にのけられんひ必定、然れば子孫末孫の耻辱脱れがたし、恩愛不便
 の妻と害し女の縁にひられざる、義信の二字と額にあて、さつぱりと味方せん爲め、錦
 祥女、留むる母の詞にの慈悲心こもる、殺す夫の劍の先には忠孝こもる、親の慈悲と忠孝
 む命と捨よ女房と、理非とのさらぬ勇士の詞、聞わけた身に叶ふた忠孝親にもらふた此
 ろらだ、孝行のため捨るは惜いとも思はぬと、母と押のけつゝとより、胸おしあくれれば引
 よせて見る見危き氷の刃なふ悲しやとのけ隔て、押わけんにも陰方なく退んとするに手
 叶はず、娘の袖に喰付て引退れば夫がよる、夫の袖と唾へてひけば娘は死なんと又立寄
 ると口に唾へてのら猫の、聒とのゆる如くにて母の目もくれ身も勞れ、わつと斗りにど
 うふし前後不覺に見へければ、錦祥女絶り付一生に親しらず、つゝに一度の孝行なく何で
 恩と送らふぞ、死なせてたへ母上とくどき欺けばわつと泣、なふ悲しいと云ふ人や、殊に

御身の望婆と冥途に親三人、残り二人の父母は産おとした大恩有り、中に一人の此母の御
 みのけす恩もなく、うたてや繼母の名の削つても、削られず、今爰で死せて、日本の繼
 母が三千里隔てたる、唐土の繼子と悪んで見殺に殺せしと、我身の恥斗りの普く口々に
 日本人の邪慳なりと、國の名と引出すの我日本の恥ぞのし、唐とてらす日影も日本と照す
 日影も光に二つになけれ共、日本の本と日日の始仁義五常情有る、慈悲専の神國に生と受
 た此母が、娘ころすと見物し、抑生ていられふら、願くば此細が日本の神々の注連繩とあ
 らはれ、我と今絞殺し屍は異國に晒すとも、魂の日本に道引給へと聲と上げ、道もあり
 情もあり、哀もこもるくどき泣、錦祥女の絶り付き母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して
 そる涙にくれけるが、稍有て甘輝席と打て、是非もなし力なし、母の承引なき上の
 今日より和藤内との敵たい、老母と是にとめ置き、人質と思われんも本意ならず輿車用
 意して所と尋ね送り返し參らせよ、いや送る迄もなく、此遣水より黄河迄よき便に白粉
 流し、叶はぬ報せの紅と流す約束にて、迎ひにお出有る筈いで紅といて流さんと、常の一
 間に入にけり、母の思ひにのさくれて、思ふに違ふ世の中と立歸りて夫や子に、何と語り

聞せんと思ひやる方涙の色、紅より先の唐錦、錦祥女の其隙に瑠璃の鉢に紅とさ入れ、是
 を親と子が渡らぬ錦中絶る、名残の今どと夕波の泉水にさら／＼、落瀧津瀬の紅葉と、
 浮世の秋とせさくだし、共に染たる泡沫も紅く、遺水の、落て黄河のゑがれの末和藤
 内の巖頭に簀打のづき座としめて、赤白二つの川水に心と付て水の面、南無三寶紅が流
 る、扱の望は叶はぬ、味方もせぬ甘輝めに母の預置れすと、踏出す足の早瀬川流れとどめ
 て、行先の堀と飛起堀と乗りこへ籬透垣踏破り、甘輝が城の奥の庭泉水にこそ着にけれ、
 先母の安穩嬉しやと飛上り、警戒の繩引らざり甘輝が前に立はたたり、呉將軍甘輝といふ
 鬚唐人の和主よな、天にも地にもたつた一人の母に繩のけたの、己と己と奉つて味方に頼
 ん爲成るに、もつてうすければはうづもない、味方にあらぬ此大將が不足なる、第一女
 房の縁と云其方より従がふはづ、日本無雙の和藤内が直に頼む返答せいと、柄に手とり
 けつゝ立たり、女房の縁といへば猶ならぬ、御邊が日本無双なれば我の唐土稀代の甘輝
 女にはだされ味方する勇士にあらず、女房と去る所もなし、病死する迄べん／＼共待れ
 まい、追風次第はや歸れ但置土産に首がゐいて往きたいの、日本の土産に已奴が首と

と、兩方拔んとする所と錦祥女聲とかけ、こく是なふく病死と待造もなし、只今流せし紅の水と見給へと、衣装の胸と押開けば九寸五分の懐劔、乳の下より肝先迄横にぬみて指通し、朱に染みたる其有様母の是はと斗りにて、あつはと臥て正体なし和藤内もどうてんし、覺悟と極し夫さへ、そころに驚く斗り也、錦祥女苦しげに、母上の日本の國の恥と思召殺すまいと成さるれど、我命と惜みて親兄弟と責がすば、唐土の國の恥と斯成る上の女に心ひのさるゝ、人の誹りのよも有るまじ、なふ甘輝殿親兄弟の味方して、力共成てたべ父にも斯と告てたべ、もう物いさせて下さるな苦しむいのと斗りにて、さへんとこそ成りにけれ、甘輝涙と押うくし、でういたく、自害と無にはさせまいと、和藤内が前に頭とさげ、某先祖は明朝の臣下、進んで味方申べき身の女の縁に迷ひしと俗難と憚りしに、我妻只今死と以義と勤る上は、心清く御味方大將軍と仰ぎ、諸候王になぞらへ御名と改、延平王國性爺鄭成功と號し、装束めさせ奉らんと武運開くる唐櫃の、二重の錦羅紋の袂緋の装束、章甫の冠花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶莫耶の劔金とみがき、絹笠さつと指のくれれば、十万餘騎の軍兵ども幢の旗、吹抜たて鉾と鉄砲鎧の袖と列ねしは、

稽山に越王の二たび出たる如くなり、母は大驚高笑ひ、嬉しや本望やあれと見や錦祥女、御身が命と捨しゆへ親子の本望達したり、親子と思へど天下の本望、此劔の九寸五分なれど四百餘州と治る自害、此上に母が存へての始の詞虚言と成る、二たび日本の國の恥と引起すと、娘の劔と追取て咽喉にがはと突立る、人々是はと立騒げば、よるまいくとはつたど睨み、なふ甘輝國性爺、母や娘の最期とも必歎な悲しむな、韃靼王は面々が母の敵妻の敵と、思へば討つに力有り、氣とたるませぬ母の慈悲此遺言と忘るゝな、父一官がかはすれば親にはこと缺くまいぞ、母の死して諫言となし父の存らへ教訓せば、世に不足なき大將軍浮世の思ひ出是迄と、肝のたばねと一糸ぐり切さばき、錦祥女此世も心残りぬの、何しに心残りらんといへ共残る夫婦の名残、親子手と取引よせて國性爺が出立と見上、見れろし嬉しげに、笑顔と娑婆の形見にて一度に息の絶にけり、鬼とあさむく國性爺龍虎と勇む吳將軍、涙に眼のくらめ共母の遺言背くまじ、妻の心と破らじと國性爺の甘輝と耻、甘輝の又國性爺に耻てしはるゝ顔のくす、亡骸おさむ道の邊に出陣の門出と生死二つと一道の母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鉄棒討は勝、攻れば取る末代不思儀の智仁の勇

士、玉有る淵の岸破れず、龍すむ池は水おれず、斯る勇者の出生す國々たり君々たる、日本の麒麟是成るのと異國に武徳と輝しけり

第四

唐土の便今やと松浦海、小むつが宿の明暮の唐の姫宮相住と、近傍隣家も浮名立て唐と日本の沙さのひ、ちくら者うと疑へり、夫も今の國性爺と名と改め、數万騎の大將軍と聞のらに、我も心の勇有り、若衆出立に姿とるへ、撫付髪の大たぶさ、ひすいの大蟬髻ふつさりと稱宜の息子の膏藥賣の、女とよもや水淺黄の股引しめて羽織きて、朱鞆木刀真紅の下緒、花の口紅雪の白粉、管笠ふのく脛高く、足元あるさ濱千鳥、濱邊づたひと日傘の、駿まつらの住吉や神前にこそ着にけれ、じう満とぐはんと祈誓とのけ手と合すると見へける、が、ひらりと抜いたる居合の手練、神木の松と相手取り、木刀のさし跳りあがつて聲とつけ、あいやつたうくあいくたう、あいやつたうと上段下段の太刀さばき、あげろう稻妻獅子奮迅、足取手の内四寸八寸身のひらき、踏込で打入身の木刀古木の、松の片枝とすつばと切て落せしり、今牛若ともいひつべし、いつの間にも梅檀女森の影より走出、ちく

小むつ殿、毎日く時と違へず變つた風俗、今日といふ今日跡と暮ふて見付しが、誰にならふて此兵法、器用なとやとの給へば、いや師匠のなけれを夫の打木刀、習ふよりなれての事、唐土の便心元なく、おむのひ舟の參らす共、お供して渡らんと此明神へ吉凶と祈候へば、是見給へ、木刀にて此松の木の真刻の如く切たるり、神納受の印と申商船の便船時節も能候と、や上れば夫は嬉し頼もし、片時も早く戻してたべと御悦びの淺めらす、御心やとく思しめせ、惣じて此住吉と申り、船路と守りの御神にて神宮皇后と宇帝、新羅退治の御時沙ひる玉汐みつ玉と以て御船と守護し舟玉神共や也、昔時唐土の白樂天といひし人、日本の智恵とはあらんと、此秋津洲に渡り給ひ、目前の景色と取あへず、せいたい衣と帯て岩はのたにあり、白雲帯に似て山の腰とめぐる、詠じ給へば大明神、卑しき釣魚の翁と現じ、一首の歌の御答へ、若ざるも、若たる岩ははさもなく、さぬく山の、帯とするのたと、詠じ給ひし御歌ふ、ぎつと詰つて樂天は、爰より本土に歸るとや、國と守りの御神の、其御歌のこけ衣我身に受て旅衣、いざとて二人打つれて舟路、はるけくなりふりや

梅檀女道行

唐子齋には、薩摩柳島田舎に、唐櫛と、大和唐土打ませて、さしもならぬ旅立や、舟と陸と行道は笠捨られず懷中に、枕とたゝむ夢たゝむ、千里と胸にたゝみこむ、女心のつよもみも、男もへにぞ引れゆく、我の故郷と出る旅君は故郷へ戻る旅、二葉に見せて梅檀女小むつが諫め力にて、大明國へと思ひ立、心の内こそ、はるのなれ親と妻とと、持し身の、何の歎きは有明の月さへ、同じ月なれど、なふ二人見なれし、閨の中、名残數々大村の、浦の濱風一村雨はさらりと露てもはれぬ我涙、袖につゝみて袂に拭ふ、鏡の宮に影とめて、泣ぬと人や見るめの浦、ふりさけ見れば久のたの、日も行末の空遠く、歸るさ何時ぞ天津のり誘へやさるへ、我夫も廿五すぢの琴の糸、結び契りし年のあす、いさすがあさて箱崎の、松としさるば、我もいそがん、磯邊傳ひに、よりものく、海士の子共の打群て、はじと石など又長半、三つ四つ五つ算へては、幼遊びも陸しく、七瀬の淀に行水も、昔の影やのくれんば、鬼のこねまど誑ひしも濡て乾ぬ旅衣唐土船とまつらがり、みなともちの浦風に、そなたの方と見給へば、磯に手ぐりのくりやがり波にもらるゝ釣舟

に、びんつら結ふたる童子一人、網のあるさで釣竿の、いとふくと眠りくる、なふく〜れちと、我々の唐土へ渡る者、よらん方迄乗てたべとぞ仰ける、あら何共なや、一人の唐土人一人の筑紫人、女性の身にて唐土へ渡るとは戀しき人の有るやらん、二千里の外古人の心、三五夜中にあらね共影と漏さぬ月の舟、とく〜召れ候へとはや指よするみなれさは、不思議の縁と打のりて、こがれ行衛も白波になぎてのどけき海の面、つゝさて見ゆる八十島と異國の人の家産に、教へてたばせ給へとよ、童子へいたふ立あがり海原はるのに指さして、いかに旅人問給へ、先われにつゝくゝ鬼界十二の島五島七島中にもあの白き島の、多く群いるの白石が島、此方に煙りの立登るは硫黄が島、扱又南に高く、霞のゝるのちどの島なり、彼は往古天照神の、住吉の明神に笛ふのせ舞曲と奏し二神の遊び給ひし所とて、二神島といふなり、なふ唐土人とぞ語るゝ、語る間に、敷島のはや秋津洲の地と離れ、夫より先のしま〜の、島のと見れば雲の峯、山のと見れば空の海、風はなけれを蜚小舟、天の舟舟いはふねの、空走り行く如くにて、山なき西に山みゆる月にささ立、日につれて日の木出し秋風の、立ものはらす其まゝのまだ秋風に鱧釣る、松江の、濱に

着にけり、人々舟より上り給ひ、誠にねちこの御情座したる様成る舟の中、のゝる波濤と時のまに渡し給へる御方は、いゝ成る人にて有やらん、人がましやな名もなき者我日の本に昔より住馴たれば住吉の、大い童子と申者、いと申て此わつは、住吉に立歸り睡朝と、待やさんと夕波の水際なる蟹の、小舟と漕戻し、追風にまのせつ、沖の方に目にけりや沖の方へぞ

九 仙山

傳へ聞く陶朱公の、勾踐と伴なひ、會稽山にこもり居て、しめくの智略とめぐらし、悉に呉王と滅して、勾踐の本意と達すとや、昔とへば遠き世の、ためしも呉三桂が、今身の上に白雲の、山より山に身とくし、太子と育て奉る、移れば變るこけむしろ、宮前の楊柳寺前の花、峯のこぼくに立のり、夕の露の間に入り、我身と以て禪とし、犂農屬車の手車も、鶯の、錦にのりへて、朝の露のはとりに、谷の猿の肩に駕し、早二年の昨日今日、暮も山明るも山、我名も君が顔ばせも、人目とつゝ、雲水に、虹のかけ橋とだへして、深山鳥やぬるこ鳥、梢にさなく鸚鵡さへ、昔とまねぶ聲のなし、水遠くして山な

かく、根ざ、芽原まきひのら、岫々と聳へし崔嵬の、山路に勞れ行末の、名にのみ聞し、江寧府の、九仙山に舉登り、暫した、すむ松風も、馴てや共と住なれし、蓬眉白髪のお翁二人、石上に碁盤をすへ、黑白二つの石の數、三百六十一目に、離々たる馬目、連々たる馬行、脇目もふらぬ碁の勝負、心のさゝかにの空にのゝれる糸に似て、身の空蟬の枯枝と成り、浮世と離れししゆだんの業、中間禪のうたいいと、太子と石段を移し參らせ枯木の株にひとがいのたせ、見とる、我も諸共に、余念の塵とや拂ふらん、吳三桂興に乗し、なふく、老人に物申さん、市中とはなれし座隱の遊び面白し、去ながら、琴詩酒の三つの友とはなれ、碁と打て勝負と争ひ給ふこと、別に樂しむ所ばし候の、翁さして答なく、碁盤と見れば碁盤にて、碁石と見るめり碁石なり、大地世界と以て、一面の碁盤となすといへる本文有り、心上の須彌山是に有り、大明一國の山河草木、今爰より見るになどめくもらん、一角に九十目、四方に四季の九十目、合せて三百六十目、一目に一日を送ると知ぬ愚さよ、面白く、天地一體の樂に二人對ふ何とぞ、陰陽二つわらざれば、万物調の事もなし、勝負いさていに、人間の吉凶の、時の運にあらずや、扱白黒の、夜を盡、

手段のいふふ、軍の法、切て押へてはねうけて、軍の花の亂れ暮や、飛のふ鳥、むれるる驚とたとへしも、白き黒きに夜る盡も、わうで昔のたのゝも、自らのとや朽ぬべし、翁重ての給はく、今日本より國性爺といふ勇將渡つて、大明の味方と成り只今軍真最中、是より其間遙のなれ共、一心の基情眼力にありくと、合戦の有様目前に見すべしと、の給ふ聲も山風も基石の、音にぞひゞさける、吳三桂はつと心付、實にく愛の九仙山、此九仙山と申の、四百餘洲と目の下に望もるすのに、おぼるくと雲のと見れば一霞、麓におつる春風の、風のままに、吹きはらす、空の彌生のなればなる、柳櫻とこきませて、錦につゝむ、城郭のありくとこそ見へにけれ、何國の誰が籠りしぞ、門高く、堀ふろく、皆く欄楯つさ、要害險阻と帶たりし、こうくたる、高やぐら、揚る雲雀や歸る雁、花と見つゝも色々の旗に翼や休むらん、閑にてらす朝日のげ、月影打て付たるの日本の美名とあらはし、延平王國性爺が乗取たる石頭城いはねと夫としらまのみ鉄炮高麗矛鎗長刀大旗小旗なびき合、吹抜のぼる馬印、へんばんとひる返り天も五色にそめなせば、藤もつゝしも山吹も共にうつろふ色見へて春の日數の盤上の、石の數をぞつもりける、わう

葉が末の、ふのみどり、はれ行雲のたへまより是南京の雲門關と名乗て出る、はとゞぎとまんまく高さ、卯の花がき今年も夏の中旬なり、方三十里に逆茂木引、關の大將左龍虎右龍虎三千餘騎兜の星と輝あし、大鼓と打て亂調子鳥の空音や、はる共、もるす方なき威勢に、劔の夏野の湧と亂し、火繩の澤の螢火と要告さびしき關の戸の、鳥も通ぬ斗りなり、日本そだちの國性爺、たとへば此關鉄石にて固めたり共、押破つて通らんと、童が障子一重破るよりも易けれ共、軍中の目醒に、我本國文治の昔武藏坊辨慶が、安宅の關守あざむきし、例と引やあづさのみ軍兵に目成せし、そもく是の、驪山の麓楊貴妃のの廟所、大真殿再興勸進の大行者、勸進帳と聽聞し勸にこれや關守と、軍勢の着到一卷取出し、味方の祈禱敵調伏と觀念し、高らうにこそ讀上けれ、それつらくおもんみれば、韃靼客土の秋の月の、無残の雲に隠れ、生死不定の永き夢、驚のすべき勢もなし、爰に往昔、帝おはします御名おば玄宗皇帝と名付、奉り寵愛の、玉妃にわのれ、戀慕やみがたく、涕泣眼にあらく涙玉とつらぬくれもひと、せんろにひるがへして大真殿と建立す、个程の盤場の、絶なんと悲しみて、隣郷のはうじの末葉諸國と、勸進す一戦合戦の輩の、敵方

にての首と矛につらぬれ味方にての、合戦勝利の勝鬨あげん、奇妙稽首敬つてやと天も響けと讀上たり、關の大將右龍虎左龍虎すの國性爺、とんで火に入る夏の虫、梢に蟬の喚いてゐれば、につと笑ひ、焚會流の珍らしのらす、門を破るの日本の朝比奈流と見よや迎、貫の木逆茂木押破り、むのふ者とたゝさふせ逃ると搦んで入礫、左龍虎右龍虎打取てなんなく過る月日の關や、碁盤の上も、せき吹こゆる秋の風霧はれわたる山城は、韃靼の軍將海利王が楯籠り、前へ巖壁後の海、要害頼みの油断と見て、秋の夜討の國性爺乗たる駒の響止、月まつ虫の聲すみ渡り、しんくうんくしづくくと、堀際近く攻寄て百千の高燈灯一度にばつと立たるの、千世界の千日月一度に見るが如くにて、城の兵寢耳に水の、あつて騒いで甲と脚當鎧はさのさま、馬と背のに、くくくくく大手の門と押ひらさ切て出れば寄手の勢貝鈴鳴し時の聲、大將團扇追取てひらりくひらりくひらり、ひらめあし、日本流の軍の下知、攻付ひしぐの翁經流もるめて打れ捕流、くりのら落し坂落し八島の浦の浦波も、爰に寄手の威勢強くもみ立く切立られ城中指てぞ引たりける、時分によしと夕やみに日本秘密のはうろく火矢打て放つ其ひゞき須彌も崩る、斗りなり、楯も楯

も海士のたぐ、しほの煙のすみがまの、火焰の秋の村もみぢ、楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮共いひつべし、國性爺勝鬨の駒の手綱とあいくつて、輪乗とあけてくるくくくくるりくと乗廻しめぐる月日にいつはりのなき世なりけり神無月しぐれて過る、岡の邊に棟門高さ城郭こそ、是も國性爺が切取しほく州のちやうらく城、軒の薨のらんくくと玉を彩どる初霞、雲まじりの夕嵐吹くる上に降つもり、塀も櫓も埋もれて雪の眺望の面白や、其外みん州けん州諸國の府、三十八ヶ所切取て、太子の御幸と待顔に所々に附城築さ兵糧軍兵こめ置て、威勢の天の氣に願れ手にとる様にぞ見へにける、吳三桂悦喜のあまり身とも人とも打忘れ、太子と抱き奉り城有る山へと走りゆく、二人の老翁引とゞめ愚なりく、目撃一瞬に見るといへ共、各百里と隔てたり、汝此山に入て一時と思ふ共五年の春秋と送り、四年に四季の合戦と見たるといよもしらじ、斯いふ中にも立つ月日太子の成長汝が身の、面影とよく水鏡水清ければ影清し汝忠有り誠有る、心の鏡にうつり来る我の先祖光皇帝、我のせいでんりうはくうん、すみあひ月の中に立つ桂のうら葉吹のへし、智見の目に上十五、下十五夜と見つれ共、衆生の心亂れ碁の、石とや嘸な見るらん、又水

中の遊魚の、釣針とうたがへり、雲上の飛鳥の、弓ののけ共驚けり、一りんもくだらず、万水とてものぼらねば、満てり欠る影あれば、欠ても満る月と見よ、暫時が程の雲隠れ遂に晴れて天照す、日の本和國の神力にて太子の位のはや出る日と、の給ふ御聲の松ふく嵐、面影斗りの松立山の壘の嵐に吹、隠れてぞ失せ給ふ、茫然として吳三桂、夢のと思へばまどろまず、實にも五年の月日と經たるしにや、我顔に鬚伸びたり、太子の尊容時のまに御背丈も立のびて、はや七歳の、御物ぞし吳三桂くと召る、御聲おとなしく、雪の深山に黄鳥の初音と聞きしおもひにて、あひくと頭と下げ、天と拜し地と拜し、嬉しさ足も定まらず二度夢の心地せり、御前に手とつるね古の鄭子龍が一子國性爺、日本より渡つて味方の義兵と起すとの音にこそ承れ、春秋五年の勳功あきらものに、大明半國の取返しゆへば、國性爺に案内して、君はおまします旨と告報せ度候と、申もあへぬに遙の谷の向ふより、なふくと夫なるの、司馬將軍吳三桂にていなさる、吳三桂くと呼る、方と能々見て、御身の昔の鄭子龍の、是のく吳三桂、命あれば珍らしや、一子國性爺が故郷の妻、梅攬皇女と侍供せしと招きあへば姫宮も、懐のしの吳三桂、おことが妻の

柳歌君、命懸ての忠節にて、うきせと渡る淨れ舟日本へ吹流され、一官親子夫婦の情不思議に二度逢事よ、柳歌君は何國にぞ縁子の何と成りけるぞ、早ふ逢ひたい逢せてたべと焦れ給ふぞ道理成る、されば、其時の深手にて、我妻の虚しく成り、后も敵の鉄炮に命と落とし給ひしゆへ、暗内とたちやぶり、我子と害し敵とあざむき、太子の山中にて、やすく育て參らせし、はや七歳の生先の是に渡らせ給ふぞと語るに付て姫宮も、わつと斗りにぞうとふし人目も、わらぬ悲歎思ひ、やられていたはしく、一官麓と見返つて、あれく貝勒王めか姫宮と見付、敵千騎にて追くる年寄骨に示威と出し踏とせつて命のぎり防さ支へんとはやれ共、宮の御上あふなし、夫へどうぞ退たいが此山不案内、谷とこそ道の有るまいの、いやく此山廻れば六十里、谷深ふて底しれず是へも招れず其處へも越されず、いのせん何とあせんと、虚空と拜し、唯今奇瑞と現し給ふ、御先祖高祖皇帝、せいでんのりうはくらん、神仙みめうの力と合せ、非常の危難と救ひ給へと、太子諸共一心不亂に祈誓有り、姫宮小むつも手と合せ南無日本住吉大明神、福壽海無量と丹精無二の心ざし、天も感應地も納受、とうこうより一筋の雲無心にして棚引けば、天の雲梯鶴の、

渡せる橋やうつらさの糸の岩はし夜るならで夢路と辿る、如くにて渡る共なく行く共なく向ふの峯に登り付、足もわぢく、慄ひけり、程なく賊兵雲霞の如くぞつと駈寄せ、あれく太子吳三桂も見へたるの思ひもよらぬ拾ひ物、鱗網で鯨と取るとの此と、的に成たる奴ばら、やれ弓と鉄炮と打取れ射取れとひしめさける、貝勒王下知となしやれ待てく、後はひろし退き場有り、弓鉄炮は叶ふまじ、こりや見よ遂に見ぬ雲梯、必定國性爺めが日本流の筭盤橋、たゝみばしなんとといふ物ならん、敵に喰物あてがふの軍法、積りや者とも渡れや渡れと五百餘騎、押合つめあひ我先にと、あいく聲とけ橋のなほは渡ると見へけるが、山風谷風さつくと雲のわけはし吹き切て、大將始め五百餘騎、とたくとと落重なりめつらう打わる天窓とくたく、泣つ叫いついやがうへ谷とも埋む斗りなり、吳三桂鄭子龍、得たりをしこし心地よしと、大石大木當ると幸ひ、投りけく打つければ、一騎も残らず剎那が中人の鮎とぞ成たりける、中にも大將貝勒王、岩根と傳ひ桂とたぐり這登れば、吳三桂遊仙の碁盤引さげこりや、此碁盤はとこるでねつて石より堅く、苦ふて口にあはず共一口くふの、已れが一目めともつて御無用の碁の相手、碁勢と

見よと頭と出せばてうを打、面と出せばはたと打、ふち付く腦も鉢も打碎のれ微塵に成てぞうせにける、ま、く本望く、本朝にも斯る例の、先例吉野の碁盤忠信、それの茅の木是はところの九仙山、先手が味方へ廻りくる四、め殺しに中手を入れて、しちやうにあげて打切て、せめて搦手たち切て、手話のせさと勝軍敵のはまど拾ひ上げ、國も御代も打あへて手と盡したる功も有り、忠義の道なつらう、道のうらよと打つれて、福州の城にぞ入りにける

第五

泰山と挾さんて北海と超るとの能はず王の王たらざるの能つるにのあらずとのや、延平王國性爺兵と用ると掌にまはずが如く、五十餘城とはふり武威日々に隆盛にして、妻の女房古郷より梅檀皇女と供し参らせ、九仙山より吳三桂太子と御幸なしせば、十善天子の印綬とさげ永曆皇帝と號し奉り、龍馬が原に八町四方の木城とあらくみ、陣幕とましく錦の幕、陣屋の上には日本伊勢兩宮の御はらひ、大稜麻と勸請し、太子と別殿に移し参らせ、其身の中央の床几にのり、司馬將軍吳三桂さん將軍甘輝同じく左右の床几に

座し、鞆大分目の勝負いくさ、評詮區々なり、吳三桂團扇取直し、凡そ謀計の淺さに
出て深さに至るに、如いなしと竹筒一本取出し、此筒に蜜とこめて山蜂多く入れ置たり、
斯の如く數千本拵先手の雜兵に持せ、立合の軍する体にて筒とすて、逆のめば、貪慾さ
るんの鞆勢、食物と心得拾ひとらん必誑口と扱と等しく數万の山蜂むらがり出、賊兵
と毒痛せしめ、漂ふ所と取てあへし八方より討取べし是御覽候へと口とぬけば數多の蜂な
り羽ふいてぞ出にける、賊兵あざ笑ひ、淺はる成る童かどしの謀計焼捨て耻のせよと積
み重ねて火とつけん其時筒の底にしおけたる放火の藥鳴渡り飛ちつて、十町四方の軍兵に
生残る者の候まじと、火繩と筒にさしつくと等しく飛んだる亂火のしおけ實にも、斯う
とぞ見へにける、吳將軍甘輝菓物入たる花折一合取出し、吳三桂の奇計尤に候、又某が謀
、この如く折籠二三千合も拵、様々の菓子餉酒肴したため、各是に燭毒と入れ陣屋
に貯へならべ置陣所近く敵と引うけ戦ひ負たる体にして十里斗り引とるべし、鞆が例の
長追、勝誇つて陣屋に込入り此食物に眼くれ寶の山に入たりと軍將雜兵我先にと掴み喰ひ
んと必定、唇に觸ると等しく片端に毒血吐、刀にちぬらすしてみな殺しにしてくれんと

、面々軍慮心と碎き評議とりくまらく也、國性爺打領さ、いづれも一理有る計略、批
判申に及はず去ながら、國性爺が魂に徹し忘れがたきは、母が最期の一句の詞、鞆王
は汝らが母の敵、妻の敵と思ひ込で本望とげよ、氣とたるませぬ其爲の自害成りとの詞の
末、骨にしみ五臟に徹し刹那も忘るゝといなし、千變万化の謀計も何のせん、只無二無三
に攻入て鞆王李踏天に、押並べてむすと組、すたくに刻んで捨すんば、たとへ國性爺
が百千万の軍功も、君の忠も世の仁義も、母の爲には不孝の罪と、錢の様なる兩眼に涙と
はらくと流しければ吳三桂甘輝と始、一座の上下諸共に皆々、袖とぞ濡しける、殊更女
の身ながらも古郷と忘せず生國と重んじ、最期迄日本の國の恥と思はれし、我も同じく日
本の產生國の捨まじと、あれ見給へ天照太神と勸請す、某匹夫より出て數の所の城と攻
落し、今諸侯王と成て各の傳に預ると、全く日本の神力によつてなり、然れば竹林にて
從へし島夷共、日本頭につくり置き、彼等と真先に立日本の加勢と披露せば、元より日本
弓矢に長し武道鍛錬のくれなく、鞆夷聞おちして二の足に成る所と疊よせて乗取んと、
此頃我女房にしめし合せたり、ヤク源の牛若、軍兵卒し是へくと團扇と上れば、あつと

答へて立出る小むつが髪かみの初元結もとひ諸軍勢しよぐんせいの元服もとく頭あたま、大和やまと淺黄あさぎに唐錦花からにしきやの成りける出立なり、假御殿かりごてんの幔幕まんまくより姫宮ひめみや走出いりみだ給ひ、なふく國性爺こくせんや、此こゝ旗はたの御身ごみの父一官ちちいっくわんの旗印はたしるし、此書こゝ付も一官いっくわんの筆心ひつしんもとなき文言もんげんと、出し給へば床せうと下さかつて讀上る、我われなまじいに明朝あした先帝せんていの朝恩てんおんと報はつせんと、二たび此土こゝに歸參きせんし功こうもなく譽ほまれもなし、老後らうごの餘命よめい幾許いくばくの樂たのしみと期ねがせん、今いま月つき今夜こんや南京なんきんの城しろにむのつて討死うちじととげ、美名びなと和漢わかんに留とどむる者也なり鄭子龍ていしりゆう老一官らういっくわん、行年ぎやうねん七十三歳しちじゅうさんさいと、讀よまかひらず國性爺こくせんやすつくと立たち、敵かたきに念ねんが入いて來た、母ははの敵かたきに父ちちの敵かたき、智略ちりやくもいらす軍法ぐんぽうも何なにのせん、旁かたわらの兎うさぎも角かくも身みに逼せまる國性爺こくせんや、只一人ただひとり南京なんきんの城しろに乘込のりこみ、韃靼たたん王わう李踏天りたつてんが首くび捻ね切り、父ちちが最期さいきの場ばとへす討死うちじして父母ちちははが、冥土めいどの旅たびと同道どうだせん今生けいせいのお暇ひま乞こと、とんで出れば、兩將袖りやうしやうそでに縫ぬつて、曲まがもなし甘輝かんきが爲ためには妻つまの敵かたき眞まことの敵かたき、吳ご三桂さんけいが爲ためにも妻つまの敵かたき縁ゆかり子の敵かたき、それくづいづれも敵かたきにゐるめなし、天下てんかの敵かたきは三人さんにん一所いっしょと駈かけ出る此三人こゝの太刀先たちざきには、いなる天魔てんま疫神やくしんも面おもてとむくべき方もなし、鄭子龍ていしりゆう老一官らういっくわん、夕霧ゆふきりくらす黒皮くろかわ緘せす、とげに立出て、南京なんきん城しろの外廓ぐわいの大木戸おほきた、いて、國性爺こくせんやが父老一官ちちいっくわんと申者まをすもの、年寄としより膝骨弱ひざほねじやくはつて人なみの軍叶ぐんかはず、されば逆若さか殿原たにがはらの軍咄ぐんはなし、安閑あんかんと

聞てもいられず此城門こゝに推參おしせんして、速すみに討死うちじし素意そいと達たつし度候どこう、あはれ李踏天りたつてん出合い此白髮こゝ首くびと取とてたべ、生前せぜんの情なさけならんとぞ呼よはりける、城しろの中なかより六尺むつぱちもたのの大男おほしやう、やさし、一官いっくわん相手に成なてとらせんと、木戸き押おひらき切きてゐる、心得こころえたりと二打三打にうちさんうち討うちぞと見みへしが、つゝと入いて首打くびうち落おし大おほきに不興ふけうし大音上おほねじやう、一官年いっくわんねんよつたれ共とも个様こがやうの棄武者あきらめしやにやる首持くびもちす李踏天りたつてん出合いれ、外の者そとが出いたらば、いつ迄いつまでも此通こゝと城しろと睨にらんで立たたりけり韃靼たたん大王だうわう壽陽門じゆうやうもんの櫓やぐらに現あらはれ出いで、國性爺こくせんやが父老一官ちちいっくわんとは彼奴かやつめよな、問とふへき子細こほあまた有り殺ころさす共とも擲なめ取とりて來きれ、承うけると四五四五十人じゆしにん捧ほうすくめに取廻とし、隙すきとあらせずめつた打捨うちすふせく、縛しばり付け、城中じやうちゆうさして引ひて入いる無念むねんといふも餘あまり有り、程ほどなく甘輝かんき吳三桂ごさんけい國性爺こくせんやと眞まこと先に、大手おほての門かどに駈付かければ引續ひつづいて六万餘騎むつまんじゆき、小むつと後陣ごじんの大將だうしやうにて今日けふと死戦しせんと押寄おしよせたり、國性爺こくせんや下知げちとなし、未だ生い死しもしれず殊ことに此南京こゝ城しろ、四方しやうに十二じふにの大門だうもん三十六さんじゅうろくの小門せうもん有り、一方いっぺんにても明あいたる方かたより落失らくしつは必定びじやう、四方しやうに心こゝろと配くわつて討うちてと相詞あひことばに手てとくばり籠かごとた、さ時ときの聲こゑ天あまも傾かたむく斗とり也、小むつが暗くら劍術けんじゆつの、牛若流うしかがらの小太刀せうたと以もて一陣いっじんに進すすみ出いで、相手あひてゑらばず時ときゑらばず、所ところもゑらばぬ此若武者こゝ死したい者が相手あひてぞと、思おもふさまに廣言ひろげし、多勢たせいが中なかへわつ

て入り、火水と飛せて戦ひける、賊兵數多討るれ共七十萬騎楯籠つたる南京城落べき様こそ
 なりけれ、國性爺のいにもして、父の生死と知るべしと、断廻つても詮方なく陣頭に大
 音上、我唐土へ渡つて五年の間數度の合戦のいに無刀の軍とせず、今日珍らしく劍の柄に
 手もあけまじ、馬上の達者劍術悉もの、韃靼勢、寄て討やと招きのければ、憎い廣言打殺せ
 と。我もくと喚いてのゝる、引寄て劍拾取た、さひしぎ打みしやぎ、銚鎗長刀もぎ取く、
 ねぢまげ、押まげ折くだき、寄くる奴原脚にさはれば踏殺し、手に觸ると捨殺し、絞殺して
 の入礫、騎馬の武者ハ馬共にひとつに搦んで手玉に上げ、四足と搦んで馬礫、人礫馬礫石の
 礫も打交り、人間業との見へざりし左しもの韃靼費よせられ、すは落城と見へたる所に、一
 官と楯の表に劍付、韃靼王と先に立て李踏天進み出、さく國性爺日本の小國より這出、唐
 土の地と踏わらし數の所の城と切取、利大王の御座近く、今日の狼籍緩怠千萬、是によつて
 親一官と斯くの如く召取たり、日本流に腹切の但親子諸共、直に日本へ歸るに於ては一官と
 助べし、承引なくばたつた今、目前にて一官と引はり切にせん、とくの返答はや申せと高聲
 に呼ばれば今迄勇む國性爺はつと斗りに眼もくらみ力も落て、打しはれ諸軍勢も氣と失ひ陣

中、ひつろと静まりける、一官はがみとなし、國性爺、狼狽たのわかれたの、七十に餘る此
 一官命存らへ何に成る母が、最期の殊勝なりとて、父にも語吹聴せしと忘れし、是程迄
 仕おはせし一大事、此輩爺が命一に迷ふて仕損せしといわれて、末代の耻辱古郷の聞へ、日
 本生れは愛におはれ義としらぬと、他國に惡名とめんは日本の耻ならずや、女なれ共汝が
 母は生れ古郷と重んじ、日本の耻といふ字に命と捨しと忘れし、是程の手詰に成り此親が
 目前に入つ裂にせらるゝ共、目もふらず飛の、つて本望とけ、大明の御代になさんと思ふ根
 性のどこで失ふた、未練也淺ましとじだんだんで制すれば國性爺父に恥しめられ思ひ切
 て、大王めがけ飛で出れば李踏天、父に劍と指當つる、はつと氣もさへ立をまり進みおねた
 るしぞろ足、頭べの上に須彌山が今崩れおつても、びく共せぬ國性爺前後にくれてぞ見へ
 ける、甘輝吳三桂互にさつと目成せ、つと出て韃靼王の前に頭と下、斯迄おはせ候へ
 共御運強韃靼王一官掬めとらるゝと國性爺が運も是迄、末頼なき大將我々兩人が命と助給は
 らば國性爺が首取て差上ん御誓言にて御返答承りらんと云もわへぬに、韃靼王、く神妙
 くと云ふ所と、飛の、つてはつたど蹴倒し絞上れば、隙とあらせず國性爺、飛の、つて父

が警戒ねち切く、李踏天と取て押へ父と縛し楯の面、まづ其如く高手小手に縛り付、三人目と目と見合せて、嬉しやと悦ぶ聲國中響く斗り也、諸軍勢勇みとなし太子姫宮御幸なし奉れば、御前にて彼奴原則ち罪科に行なふべし、夷國とい云ながら韓國の王なれば縛ながら鞭打して本國へ送るべしと、左右に分つて五百鞭、半死半生打据て引退けたり、是のらが李踏天、元のおこりの八逆五逆十悪人、あたみ恨のない様に、國性爺は首引拔ん、兩人の兩腕と三方に立のり、聲をのけて一時にゑいや、うんと引ぬき捨、永曆皇帝御代万歳、國安全と壽くも大日本の君が代の、神徳武徳盛徳の、満て盡させぬ國繁昌、民繁昌の恵みによつて、五穀豊饒に打續き万々年とぞ祝ひける

國性爺合戦終

明治廿四年一月十九日印刷
同年同月二十日出版

（定價金七錢）

發行者 早矢仕民治

印刷者 松本秋齋

發兌元 丸善書店

全 武藏屋叢書閣

賣捌書肆

- | | | | | | |
|---------|-------|---------|------|----|------|
| 神田南神保町 | 松江堂 | 神田區表神保町 | 中西屋 | 横濱 | 丸屋書店 |
| 神田洽集館内 | 黒雲堂 | 日本橋通一丁目 | 大倉書店 | 京都 | 大黒屋 |
| 神田表神保町 | 上田屋支店 | 本郷區元富士町 | 盛春堂 | 大坂 | 丸屋書店 |
| 京橋彌左衛門町 | 巖々堂 | 本郷四丁目 | 文壽堂 | 大坂 | 博聞分社 |
| 京橋尾張町 | 東海堂 | 神田錦町一丁目 | 武藏屋 | 神戸 | 久榮堂 |
| 芝南佐久間町 | 栗ばら | | | | |

故近松門左衛門翁作淨瑠璃本既刊書目

興行年月は樂曲類纂に依る

出	世景清	貞享三年二月	行	廿三年十一月再板
天	智天皇	元禄二年三月初興行		二十三年五月三板
十	日二會	元禄三年三月初興行		廿三年十二月四板
百	日會	元禄十年十月初興行		二十三年五月三板
蟬	最明寺殿百人鴈丸	元禄十四年五月初興行	○此符號は合卷	二十三年十月出版
心	中重井筒	元禄十六年三月初興行	◎此符號は合卷	二十三年十一月出版
傾	城反魂香	寶永元年四月初興行	△此符號は合卷	二十三年十月再板
戀	八卦柱曆	寶永二年八月初興行		再板中
今	宮の心中	寶永三年九月初興行		二十三年三月再板
吉	野都女楠	寶永七年正月初興行	◎	廿三年十一月出版
國	性爺合戰	正徳元年九月初興行		二十三年九月出版
日	本振袖始	正徳二年七月初興行	△	二十三年十月再板
本	朝三國志	正徳五年十二月初興行		二十四年一月出版
關	八洲繫馬	享保三年二月初興行		二十三年八月再板
伊	達染手綱	享保四年二月初興行		二十三年五月再板
一	太平記	享保九年正月初興行		二十三年四月出版
綱	目大塔宮囃鏡	享保十七年六月初興行。但し遺稿トアリ		二十三年十月出版

近松門左衛門翁作
竹田出雲線
松田和吉
定價七錢
郵税二錢

享保八年二月初興行

故井原西鶴作

再版
好色五人女
全五卷
合本一冊
定價十二錢
郵税二錢

批評

「國會」或る一部の小説家が六韜三略の巻はゞに有難がる西鶴翁の好色五人女は西洋紙活板摺に衣裳と改めて明治の世に再生せり原本にあらざれば硝子と隔て、美人と物いひ交す心地すなご、云ふ人は兎もあれ未だ五人女に接せざる者は一たび之と讀んで其氣前と知るも可なり

「國民之友」好色風の小説やうやく盛んならんとす今や西鶴の好色本續々翻刻せられんとす、小説家または批評家の中に西鶴と讚美して措らざる者出で來れり、彼は實に此れの結果なりとす、西鶴の想像は身近なり其文字は亂雜なり、其取るべき所は只活眼のみ、然るに今や人々妄りに彼と讚歎するに雷同せんとす、本書の出板人分疏して曰く、「社會は常に人と作る」と、此語として眞箇の格言ならしめば、西鶴の今日に再生せる者豈亦故なる

らんや、豈また故ならんや

「東雲新聞」 非原西鶴の名久しく本函の底に埋もれて知る人もなきまでになり果しが近頃其の著もて嘯す者續々と現はれ明治の文學社會に此上なき名譽を得たるは西鶴の右に出るものなき程なり西鶴一代の著述數へ來ればなほく多るの中に此著の如きはるの一代男、二代男、三代男、一代女、などと共に一世と警破したるものと聞ゆ原本猥褻の個所は翻刻者の注意もて之と削除し代ふに○と以てしたるの注意至れりとひふべし此書紙質と擇ひ活字も鮮明にて一部の正價十二錢なり

「東京新報」 近松門左工門の著作全書と出版したる武藏屋と丸善書店に於て今度發賣したる故西鶴の好色五人女は此節元録文學の流行に連れ其價も騰貴して古本ならば一部二三圓にも上るべき珍本と僅十二錢にて一般讀者に頒つものなり

○好色 一代男

井原西鶴作

○雙生 隅田川

近松門左衛門作

○心中ニッ腹帯

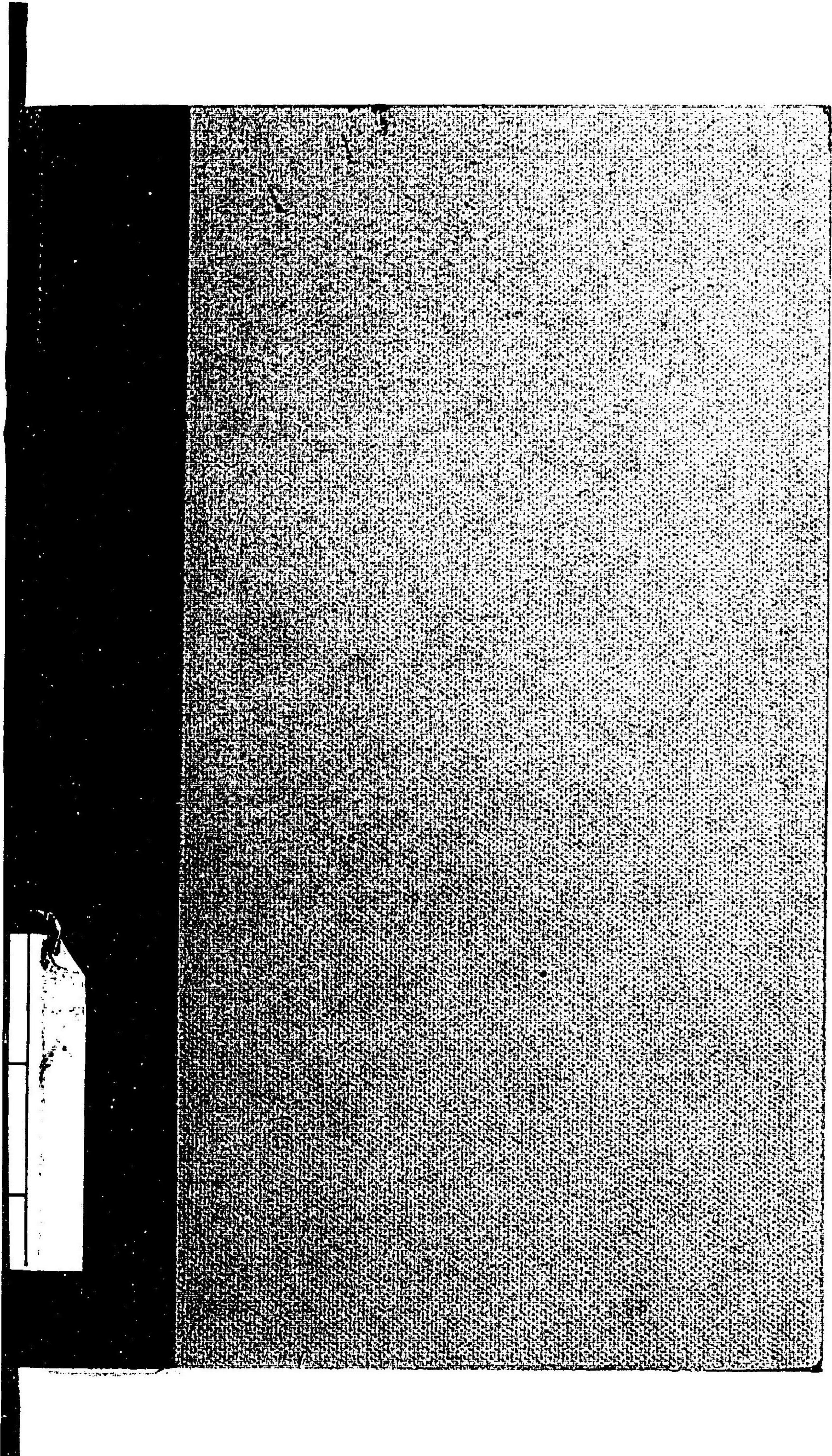
紀海音作

近刻

計 K-29

晉文子庇威

72



国性爺合戦

国立国会図書館

912.4
Ti238k2
m

088229-000-0

912.4-Ti238k2m

国性爺合戦

近松 門左衛門/著

M24

DBI-0052

